

不況と戦争

冷害と農村

昭和時代はひどい不景気で幕があげられた。昭和五（一九三〇）年一月一日、浜口内閣は慢性的不況を打開するために金輸出解禁を強行したが、迷惑は全くはずれ、不況は最悪の事態におちこんだ。この恐慌で痛手が最もひどかったのは、東北地方単作地帯の農村であった。五年は天候が理想的で、まれにみる豊作であったが、笑えない皮肉の「豊作貧乏」とよぶ米価の大暴落をまねき、農民をいっそうやりきれない気分にした。四年一石二九円一〇銭が、豊作予想となった五年には二五円五五銭と下がり、五年産米が出まわった六年は一七円五〇銭にまで下落している。どんなときも、不況や不合理のしわよせがくるのは、日本の底辺ともいえる農村であった。

さらに追いうちをかけて、六年には東北地方全体が大凶作に襲われた。郷土では五割減収はざらで、山手の村では収穫皆無もめずらしくなかった。この年は春の雪どけがおそく、五月になっても低気温の日がつづき、晴天も少なかった。六月下旬にやや回復のきざしが見えてきたが、それもつかの間で、七月に入っていっそう低温の日がやってきた。夏に臨み綿入れを着るほどの平均気温一七度六分であった。典型的冷害型の気候で、冷害のひどかった二（一九二七）年の気候にも比較できないほどの天候である。町の開業医笹尾朝敬は、このころの世相などを日記に書きのこしている。

五年十二月二十五日

不景気絶頂、物価下落、米は六七円、農家の破産者多数、（略）緊縮のため工事も少なく大工左官石工諸雇人足に至るまで閑散、北海道カムチャツカ出稼人も不況により募集不足のため失業多く、（略）給料取りの世の中なぞ評して居たところ町村諸税金不納者多く教員の給料不払いの町村もあり、のみならず学級減少教員淘汰の評さえありて人心恟々不安極りなし、電灯値下げせざればとて、ランプに逆戻りせる部落諸所にあるを聞く。（略）

学校生徒の欠食者も多数出ずるという有様。

六年七月十二日

稲作況悲観さる、大曲県農調査によれば本年草丈は平均一尺三寸にして例年平均一尺九寸二分に比し六寸二分低く、分・け・つは本年平均十一本三分にして例年平均十六本九分に比すれば五本六分の差を来たし、是れを歩合にすると今年は平年作より驚く勿れ三割一步と言ふ未曾有の凶作を予想さるる作況を来たした。

医師らしい科学的な予想よりも、現実の結果はさらに絶望的に悪かったのである。七月よりも八月・九月の自然条件がいっそう悪くなったからである。八月は雨天続きで洪水。九月一二日には早くも台風がやってきて被害は大きかった。冷害に洪水と台風が輪をかけて大凶作になってしまった。町長で俳人であった南五北嶋卯一郎は、「酒なくて百姓淋し芋の秋」「芋も瘠せて百姓のこの衰へや」という句を残している。

売られていく小学校を卒えたばかりの娘たちの姿が、駅の待合室にみられた。娘たちは、つらい労働の待っている紡績工場や、暗い運命が口をあけている苦界に向かつて旅立っていった。周旋屋から払われる彼女らの前借金は、米二、三俵位のものであった。前借金もさることながら農家では「口減らし」のほうも大切であった。

九（一九三四）年・一〇年とさらに連続して冷害が襲ったほかに、七年八月四日の洪水・八年九月五日の台風の被害などが重なって、農村の窮乏がさらに加わった。町には失業者があふれた。国・県は各地に救農・土木事業をおこした。馬場目川の護岸工事や町山林道の開さく工事、五城目街道の改修、大由沢や袖ヶ沢ダムの建設・用水路新設、改良も、この種の工事であった。その賃金は一日六五銭であるが、ビール一本四五銭と比べると窮民が潤ったとはいえない。

九年の五城目小の欠食児童は九名といい、また五城目署の押えた身売り娘の数は、芸娼・酌婦一一、女工六八、その他一九、前借金は芸娼平均八〇円・女工平均三〇円という。警察に知られた数よりも、実数ははるかに多かったと思われる。署管内一位が五城目で、二位面潟村四八名である。八年に北嶋町長は次のようにいっている。

労働所得標準（昭和5年度）

		労働日数	年収入			労働日数	年収入
左石木大表時金裁提鉄綿下塗	官工挽工師計工縫灯業打	180日	288円	指結菓榎疊理車馬	物桶子付刺髪夫挽	225日	270円
		225	360			270	297
		180	198			270	189
		225	338			180	324
		225	338			275	243
	具銀細工縫灯業打	270	297	車夫挽	日	285	513
		270	297			270	216
		270	297			180	432
		225	293			225	男180 女90
		225	293				
竹駄物		270	135	雇、皮、細工、曲物、榎割		225	113
		270	135				
		270	135			270	189
		225	270			225	338

（注） 以上必要経費車夫、馬車挽3割、他は1割。弟子は職人の半分。製造工場持ちは職工の5割増。

これは、税金割当の五城目町役場の標準である。

大正の大火直後二円五〇銭であった大工賃が、昭和に入ると一円三〇銭となり、さらに一円になっても大工に仕事が無かった。大正四年渡辺五松堂発行の『五城目案内』には、五城目町の戸数一〇四五戸とあり、大火のあった大正一〇年は一一一七戸である。ところが大火後は八三五戸となっている。昭和初年は次のようである。

戸数八五七戸 人口 男二二〇二 女二三六一 計四五六三人

職業別戸数 工業三〇六・商業二〇六・労働一一五・農業八一・公務自由業七二・交通一〇・その他一四

八百戸台におちた戸数は、なかなか千戸台に回復しない。町の不景気がその最大の原因であろう。さきにあげた新聞の元日号で田口耕市郎は、当り年の弁として隣村馬川村との合併によって戸数千戸台への回復を主張している。北嶋町長の年頭の辞にも、町勢振興をどうするかという苦悩がにじんでいる。

救農土木の一例として、前述の馬場目川治水工事がある。この失業救済事業は宮田源蔵町長の代にはじめられた。大正一五年に洪水で流失した新町馬城橋の復旧工事を契機と



北嶋卯一郎

経済界の不況は愈々深刻を極め居るも、近時米価の向上と救農事業の關係に依り多少活気の見ゆるは稍意を強ふするに足るなり。而しながら、此の工事も長く続くにあらず、亦々労働者諸君の困難を来す事と思ふ。又一面物価騰貴の為未だ一般の購買力が増進せられず、且つ割合に商工業者を潤ふすに至らざるに付、当分不景気の声を脱する能はずと信ず（略）

本町道路の幹線は殆んど県道に属するも、年々意の如く修理出来ず、通行人の困難尠からざるを以て（略）修理の奨励を為し人道らしき体裁といたく考え居れり。又救農事業は労働者の多き本町に於ては、最も必要なを以て昭和八年度にても開始の見込なりとす。阿仁道路は前年二万余円の経費を以て富津内村川堤より約一千六百米の工事に着手せられたるも、尚引続き着工方に付過般富津内上小阿仁村長等と知事及県議員等に陳情し置けるに付、八年度救農事業として着手せらるる事と思ふ。（略）

内川村小倉に設置せらるる溜池は愈々昨十二月二十四日起工式を挙行せられ、着手の事となり、水路は本町田地の大部分に灌漑し得るとの事に付頗る好都合なりと思ふ。若し予定の通進行せば町有山にある町溜池の水が余剰を生ずべく、斯かる場合には多年の宿望たる町内に通水し、消防及衛生上に使用する事が出来、又更に進んで耕地整理の促進とも考え誠に慶賀に堪へず。（略）

納税成績は漸次低下し（略）甚だ遺憾なり。固より数年来打続く不況の為困難の事情は十分諒とするも、町に於ても諸般の支出に借入金をして居るに依り余計な利息を払ふ事となり、完納者に対しては二重の負担を増しては困る故に、未納者は出来得る限り早く納められたく（略）。（北嶋町長「年頭に際し町治所感」『湖東時報』昭和8・1・1）



南秋田郡第二回産馬共進会（大正3年、上町通り）

して橋から南の護岸工事を施したのである。昭辰橋が架けられたのもこのころである。昭和の辰年から昭辰橋の名がつけられたのであるが、辰年は三年である。橋が架けられたのは、馬城橋以北の護岸工事が完成したからで、この護岸の上に「川端小路」という護岸上の道路ができたと同時に、町は悩まされている水害から守られたのである。このあたりは、かつて渡辺彦太郎が治水に苦心したところで、五城目は治水の上に出来た集落であったことは、現代に入っても変わっていない。

八年二月二〇日付の「湖東時報」によると、地方匡救土木の農林省関係林道工事と町営新道路新丁川端線工事の使用人夫は延五千六百人で、最高一円から最低三〇銭の労賃を得ている。

以上のような不況の時代でも、五城目伝統の市や馬市は大いにぎわった。湖東部一円の物資集散地としての五城目の性格は、不況の中でもほとんど変わっていない。もしも、このような「市」がなかったら、当時の五城目は火の消えたような状態になっていたであろう。また周辺の村に波及する経済効

果も大きいといえる。

馬市は安永五（一七七三）年の市日掟書にあるように、最初は古河町に市が立ち、それ以来毎年馬市がひらかれている。古代で述べたとおり、馬場目は「牧」のおかれた馬産地であったから、この馬産の伝統は農民の手によってまもられてきたのである。明治期に入ると、馬は富国強兵策の中で重要な兵器のひとつという考えに立ち注目されるようになった。馬の数と所有者をはっきりさせるために、村毎に「総馬改元帳」がつくられている。

馬場目を中心とした郷土の馬産は政府の「馬匹改良」奨励と「馬小作」というこの地方にうけつがれている民間の慣行で、順調にのびている。五城目に「種牛馬区」が設けられ、明治末から県から優良な種馬がまわされてくるようになったのは「馬匹改良」運動の具体的あらわれである。

馬市は種牛馬区がおかれてから、「二歳駒せり市場」と名づけられ、高性寺や役場（現・五城目電話局の場所）がせり場となり、上町下町が馬の繋留所となった。三日から五日間にわたって各地の馬匹が集まり、北海道からやってきた。町にはサーカスがかかり、祭典時以上の人出とにぎわいとなり、出場数は二、三百頭が珍しくなかった。なお、毎年五月のお祭りすぎには、馬の共進会があつて、そのときも町は人出でにぎやかであった。「数年振りの高値、活気立つ馬産界」という見出しの、新聞記事がある。

六七両日（八年八月のこと）筆者注）本町に開催した定期家畜市場二歳産馬のセリ市成績は左の通りでセリがけ頭数二歳馬は百九頭で全部売れ、依託馬（松前馬）は四十一頭入場の内三十一頭売買済みとなりこの合計百四十頭で総価格九千五百九十九円の取引が行はれ産出頭数不足乍ら昭和四年来の高値で昨年の一頭平均価格に比べ五割高の好況に馬産家は久し振りの悦に入った、（略）

（湖東時報）昭和8・8・20

馬市は不景気のときでも、案外好況であったことと、それが町の経済界の大きな刺激となりテコ入れとなっていた。北海道からも馬喰が入りこんで、町の物産の即売会や露店・飲食店は大きな収益があつた。

六（一九三二）年九月一八日満州事変がおきた。動員された兵士の多くは、不況の東北地方農村の兵士であつた。貧しい農民の出である彼らは、満州国が建国されると、今度は満ソ国境の警備についた。寒さにつよく、文句をいわないまじめな性格の東北農民兵は、そうした任務にはうってつけであつた。秋田の部隊歩兵一七連隊も、満ソ国境に展開して、郷土出身の兵士は多くはそこに送られた。

小作問題統覧

農村不況は昭和初期にそのどん底におちこんだ。満州事変はこうした深刻な国内問題を、戦争に目を向けさせることによって忘れさせ、危機感をあおることによって政治批判をかわそうとする意図から仕掛けたものともいえる。しかし、不況からはいのぼろうとする農民は、小作人組合や農民組合を結成し、社会主義的労働運動と結びついて、さかんに「小作問題」をおこし地主と交渉をもった。政府は大正一三（一九二四）年七月二二日に小作調停法を公布し、こうした農民たちの動きをおさえようとした。大正六年八五件であった小作争議は、一四年には千七百件にのぼっている。秋田県では、小作調停官において調停法を実施したのは、大正一五年六月一日である。このころの小作と小作料を、下井河村（井川町）の例でみてみよう。

昭和三年 下井河村の農業

戸数五三八 内農家四四六（専業三二〇 兼業一二六）

農家の中 小作五割 自作兼小作四割 自作一割

耕作面積 小作田四四七町 自作田一八〇町 計六二七町 小作畑六町

自作畑一五町 計二一町

小作田四四七町のうち二三六町（四割強）が百十四名の不在地主の所有となっている。

今戸部落の例

大今戸 二〇戸の地主が中心の集落。

小今戸 六〇戸の小作人の集落、漁業を兼業。

耕地 本田一四五町 湖岸新開地七五町 不在地主所有地一四町

計二三四町

『五城目町の歴史』

在村の小地主は大正初年まで自作者であったが、農業労賃の値上がりや小作希望者が多いことなどから自作をやめ、

高率小作料で小作させるようになった。

本田小作料は百刈（一反三畝）に付三斗入六俵、即ち反当一石三斗八升が標準であるが、田の売買価格が小作料の高で決定する慣行であったから、地主がかわるたびに小作料が上がった。このころの小作調停で係争中のものをみると一石六斗というもののさえみられる。反当小作料は、一石四斗五升以上のもの二割、一石四斗以上のもの四割、一石三斗五升以上が四割となっていて、相当に重い。

大正期末一日市に生まれた小作人組合の運動は、周辺の町村の農民にも影響を与えずにおかなかった。大川の県民でこの組合枠入るものもあった。馬川村館越の本間三造らが、二年二月に小作地取上げに対して小作調停を秋田地方裁判所へ申し込んでいるが、これは五城目における調停申立ての第一号である。

ここに郷土の某から出された調停申立てをあげ、裁判所の調停事項を示しておく。この程度の調停では、裁判所が農民の信頼を得るところまではいかなかった。必然的に、小作争議ははげしいものになり、長びくようになった。

調停申立書

争議土地 ― 郡―村―字 ― 反―畝―歩

小作人の申立

争議ノ実情、別紙目録記載土地ヲ昭和三年ヨリ小作料一反二付一石一斗ト定メ小作シ居タルニ、右土地ハ村農会調査統計表ノ如ク昭和三年ヨリ昭和七年迄ノ平均收穫ハ一石四斗ヨリナク契約ノ如ク小作料ヲ納ムレハ肥料代ハ勿論一家ノ生計困難ニツキ再三再四相手方ニ小作料減額ヲ要求セルモ応セス苦心シテ納入、不足分ハ年賦払ノ契約セリ、然ルニ昭和六年度ト七年度ハ意外ノ不作ニテ小作米ノ收穫モ無ク止得ス再ヒ懇願シタルモ応セス、争議ノ状態ニテ今日ニ及ヘリ、前記ノ如キ事情ナレハ昭和七年度以前ノ不納米ヲ切捨テ昭和七年度ヨリ一反二ツキ七斗ノ小作料ニ決定相成様御調停相成度、右小作調停申立候也

昭和八年二月十七日

申立人氏 名

秋田地方裁判所 御中

調停事項

- 1 小作米は昭和八年から三年間の平均收穫米を以て双方協定の昭和七年以降相当減額の事
- 2 昭和八年から十年までは検見により一石八斗以下の時は双方協定の減額の事
- 3 昭和六年未納分は双方契約通り三年賦で支払う事
- 4 昭和七年未納米は一石五斗を切捨、残は支払う事

上井河村赤沢では小作人たちが「全農組合」に加盟し支部を結成、三年以来毛引問題で関係地主と争議をつづけていたが、五年一〇月二五日に五城目町の永井旅館で地主側代表桜庭庄左衛門・近藤泰助・畠山仁三郎・坂谷市右衛門らと組合代表が会い、永久減額と未納米二百俵棒引の条件で解決している。解決条件とスローガンは、次のようであった。

解決条件

- 1 昭和三年度以前の未納小作米は全部棒引
 - 2 昭和四年度五割毛引で二割五分即納、二割五分は来年度で完納、不作の場合は延納
 - 3 本年度より一等田地一石六升、以下十三等級別に永久減額（解決反別五町八反歩、旧小作料より約四十俵減額）
- 農民組合 不況対策スローガン
- ・ 貧乏人の税金を待て。
 - ・ 借金支払猶予・利子棒引。
 - ・ 産米検査制度を改める。

- ・ 医薬料は四割下げる。
- ・ 電灯料は五割下げる。

一日市農民組合は、二年一月に関係地主に対して小作料の三割減額の要求を出した。この減額要求運動には、同組合の大川支部として大川村の農民多数が参加している。この運動は二割減の協定を結んでおわっている。さらに、四（一九二九）年九月には、大川に小作料永久減額を要求して争議がおきた。組合の中心となったのは、村議の八柳京蔵・北島永助らであった。当時、大川本村だけで一二〇人の小作人がおり、最高一石六斗の小作料を反当収量二石二、三斗からとられるので、小作人の生活は想像以上に苦しかった。このように、次第に活発化してきた農民運動も、戦時体制の強化とともに弾圧されるようになった。

その決定的な事件は、一二（一九三七）年二月一日の「人民戦線派」の全国一斉大検挙である。これによって、農民組合の指導者は根こそぎ捕えられた。大川では八柳京蔵ら、面湯では畠山勘五郎らが検挙されている。この弾圧によって、組合の組織はすっかりつぶれてしまった。以後、小作争議もほとんどなくなった。

一四（一九三九）年二月六日、新たに小作料統制令が公布され、小作料の額・率・減免条件等が統制されたが、それは小作人に有利なものではなかった。この法律の四条による改訂を、大川の例でみると次のようになる。

大川 四二七五反三〇六

改訂小作料 一石一〇四 契約小作料 一石一三〇 実納小作料 一石一二八

産業振興の施策 ・ 信用組合設立

町の商工業者の大部分は中小零細業者であるため、金融の手あてが特に不況風の吹く時代には必要であった。町内商工業者は、銀行融資よりも、無尽や金融業者などからの個人貸借にたよっていたから、金利が高いばかりでなく円滑にいなかった。金融上の隘路を開きようと、大正四（一九一五）

年有志によって信用組合の設立をみたが、翌年解散している。

しかし、不況の波がおしよせると、地元産業の振興は金融対策が先決であるという声が、商工会を中心にして大きくなってきた。二年の秋の商工会総会では、一致して信用組合を自らの手で設立しようという決議があげられて、具体的な行動に移っている。そこで、商工会役員全員と町長・助役、町内毎の有力者で、創立委員会を構成した。気運をもちあげるために講演会を数回ひらいている。

切実な問題であっただけに設立のための業務はスムーズに進み、三年九月一〇日五城目共栄信用組合が町役場の一隅をかりて業務を開始した。これが、県内三番目に発足した五城目信用金庫（現秋田信用金庫五城目支店）のはじまりである。発足当時の役員は、組合長鈴木喜太郎（町助役）、理事今村久一郎・長谷川専治・菊地庄之助・近藤泰助・鍋谷由治・坂谷八十治、監事宮田礼蔵・福田仁兵衛である。組合長が町助役であり、発足時の臨時的店舗として役場の一部を貸していることなど、この創立・発足には商工会の努力もさることながら、町の全面的バック・アップがあった。

ちょうど中小工商业者低利資金の制度がはじまり、その第一回資金二万円を利用して貸付金とすることができたのは、まことに好運であった。経費節約のため会議費・接待費・視察費などは役員の自弁とし、まだ海のものとも山のものともつかない組合の経営には、非常な決意と努力をしている。そうした運営が実を結んで、創業年度は約六〇円の欠損にとどまり、次年度には約三九〇円、三年目の五年度には約二千八百円の剰余金となった。この数字はまた、中小企業者の利用がいかに多かったかを物語っている。五年度からは、組合員に年四分の配当を実施している。

六年四月には、下夕町一九五番地（仲ノ小路）にあった土蔵風の建物を事務所を借り、一〇周年の一三（一九三八）年九月一〇日には、下夕町六四番地（仲町）に事務所を新築、落成式を行なっている。店舗の建物は、木骨コンクリート造二階建、工費一二、八〇〇円、町の下町通りの中央付近にあり、当時は町の一偉観となったものであった。

その後、法令の改正などにより農業会に統合されたり、名称が変わったりしたが、二七（一九五二）年一月五日五城

目信用金庫となった。町民が自主的に設立し経営してきた金融機関として、県内でも歴史が古く有数な業績を誇っており、近年近隣町村へも積極的に進出しているが、町の産業経済の発展を支えるものとして注目してよい。町の工商业者で信用組合（信用金庫）の融資によって支えられ、援助されたケースは枚挙にいとまがないほどである。五城目信用金庫は平成一六年秋田信用金庫（本店・秋田市）と合併。秋田信用金庫五城目支店となった。

農村対策

農業の面では、まず窮迫する農民を救うカンフル剤が必要であった。それが、「救農土木」であるが、その土木工事が農業基盤整備工事ということになると、一石二鳥の効果をあげることになる。〔馬場目川用水改良事業〕は、この一石二鳥の郷土における大事業であった。

湖東部の開拓の歴史で特筆されるのは、慶長年間（一七世紀初頭）の戸村堰と、元和年間（十七世紀前期）の真崎堰工事による開田であることを、近世の章で書いてある。この二つの用水路の水がうるおす田地は、湖東部十カ町村（五城目・富津内・馬川・馬場日・大川・一日市・面潟・上井河・下井河・飯田川）の約二二〇〇町歩に及んでいる。しかし、両堰とも馬場目川・富津内川の自然流水を横止めと水門によってとり入れるという通水開始当時と同じ方法では、毎年のように水不足はまぬがれず干害がしばしばおきている。

これを解消するために、馬場目川流域用排水改良期成同盟会（会長面潟村長斎藤岱之助）が関係町村・農会・水利組合で組織されたのが三年のことである。その運動が五年近くもつづけられた結果、七（一九三二）年馬場目川用排水改良工事が着工されることになったのである。県耕地課では、着工に先だつ八月に馬場目川流域に二カ所、井川流域に一カ所の農業用の大貯水池をつくることを発表した。自然流水だけにたよっていた湖東部の水不足を解消しようという一大計画であった。当然、その第一着手は馬場目川のほうであった。間もなく、馬場目川用水改良事務所（所長農林技手伊藤藤廉）が五城目に設置された。この大工事が急に決定したのは、不況の農村を救うための土木工事いわゆる「救農土木」

をおこななければならなかったからであった。

このときから少しくれるが、九年の冷害は二割以上の減収となったが、その被害は当然山間部でひどく、馬場目村では皆無が六〇町歩、平均五五％減収であった。そこで、農業土木三千円・村道工事千四百円・林道開設五六〇円・営林署土木工事五四〇〇円の救急工事をおこなっている。富津内村では、三分作以下一三町歩、平均四割減収であった。そこで農業土木三千円・林道改修一五〇〇円・林道開設四百円・営林署土木工事二五〇〇円の工事を行なっている。内川村では、皆無二〇町歩、平均五割減収であったので、四一〇〇円の救急工事を実施している。これらの予算の大部分は国庫補助金であった。

用排水改良は三カ年継続事業として着手され、総工費一二万円である。第一期工事は工事費八万四千円で、戸村堰関係の貯水池を建設することにした。予算は四分の三が国庫補助金、八分の一が県補助金、受益関係組合が八分の一を負担することになった。

貯水池の候補地は外小倉と大場沢となったが、九月の耕地課の実地測量によって外小倉に決定となった。これに対して小倉住民はこぞって反対を唱えた。小倉は山に囲まれた平和郷で、三〇町歩程の水田を二八戸の農家が自小作している。農業だけでは生活が苦しいので、近くの山に馬を放牧しワラビ根を掘ってネバナ餅をつくり市に出していた。ネバナ餅は、小倉ばかりでなく内川村の特産であった。このころの小倉全体のネバナ餅での収入は年間約千円である。現金収入の少ない農村としては、現金になる副業だけにありがたかった。

県の設計によると、水田が八町歩もつぶされる。年一六〇石の収穫減となり、ダムに貯水されると、放牧地と秣場まぐさばがせめられる。そのかわりにワラビ山を使うしかないから、ネバナの生産が減ることになる。限られた土地しかない村では、八戸は移住するしかない」と計算する人もいた。村の助役千葉喜平治は小倉の人であったので、千葉が反対運動の先頭に立ったが、県耕地課は反対運動を歯牙にもかけず押しきった。

外小倉大由沢貯水池の規模は次のとおりである。

貯水池面積	約一四 ha	貯水量	約七六万三、〇〇〇 m ³
堤塘高	約二一・五 m	同 長	約一二六・七 m

まわりには一間幅の周回道路が約四キロにわたってつくられ、水は五城目・富津内・面潟・一日市の水田七百町歩を一カ月にわたって灌漑できる量であった。起工式は二月二十四日五城目小学校を会場にして行なわれ、武田知事・山本県会議長が臨席している。

つづいて八（一九三三）年五月末には、第二期工事として馬場目村門前の袖ヶ沢貯水池建設がはじめられている。この貯水池の規模は次のようになっている。

貯水池面積	約一二 ha	貯水量	約七六万二、〇〇〇 m ³
堤塘高	約一九・五 m	同 長	約一〇一 m

ほとんど大きさが大由沢と同じなのに、工費が半分近い七万円というのは、築堤条件がよかったからである。このダムの水は、いったん馬場目川におとされてから真崎堰にとり入れられるようになっていた。馬川村二五二町歩・馬場目村二五町歩・大川村四一五町歩・下井河村二六〇町歩・上井河村一町歩・飯田川村一〇四町歩・合計約一〇六〇町歩となつて大由沢より三五〇町歩ほど広い。

三期工事は幹線水路工事で三万円の予算ではじめられ、井川水系大菅沢ダムは、五万円の予算で九年第四期工事として着工されている。この貯水池の受益面積は、上・下井河村で五二〇町歩である。

馬場目川水系の第一期から第三期までの工事がおわって竣工式があげられたのは、一〇（一九三五）年七月二一日である。総工費二四万四千円余の湖東部空前の土木工事の完成を祝うために、式場の五城目小学校には知事をはじめ関係者が二百人も集まった。この大工事によって、農村の不況は不十分であつてもいいとめられるという形になった。

奥地の開発と道路

このような施策は、郷土の奥地に改めて目を向けさせる機会にもなった。

貨物運搬の馬車の往来に加えて近年自動車の隆盛は、さらでだに悪い県道をますます破損の時期を早め、五城目・一日市間の道路は名状すべからざる悪路となり降雨の期に入れば泥田同様足の踏み場もない始末で自動車の立往生が珍らしくなく、人達を悩ます事甚しい。又阿仁街道も同様で貨物の運搬が難渋を極めている。

〔湖東時報〕昭和5・6・20

一日市と米内沢間の県道は、五城目街道・一米道路などともよばれる道路で、二八（一九五三）年夏に大改修工事がおわって自動車を通れるようになり、四五（一九七〇）年には国道二八五号線に昇格している。古くから県北と中央をむすぶ重要な道であるのに、出羽山地の山中地域を通ることから、明治以後もその整備がとり残されてきていた。

明治時代県会議員であった北嶋孫吉は、地域発展の鍵は阿仁道路であるという町内有志の考えを代表して運動をつづけ、県道に編入させた。しかし、名目は県道でも道路改修の予算はつかず、中津又の奥になると馬の通行さえ困難なくらいであった。ようやく富津内村・上小阿仁村間道路改修工事に着工したのは、明治三二年四月であった。工事区間からして、峠の改修である。しかし、この工事は郡境の峠道を開いて馬で越えられるようにする程度のものであった。

富津内・馬場目の奥地開発は、町の中心産業である製材・木工業の資源の確保にもつながる。出羽山地を越える交通路を開くことは、町の商圏を拡大するばかりでなく、県北と県都を最短距離でむすぶ道路の要地として五城目がおかれるという、大きな意味があった。

一米線鉄道建設の運動もはかばかしく進まず、五城目軌道線ができただけであつた。しかし、この運動は地域の人びとの胸の底にのこり、燃えつつけていた。鉄道がだめなら道路をまず通そうという声が高くなっていた。六（一九三二）年になると商工協和会（会長根由忠岐）が、高まりつつあつた阿仁道路改修の声をバックに、阿仁道路の実地視察の計画を発表した。視察は六月一日に行なわれた。協和会・商工会・町議会・各会社の幹部中堅が参加し、途中小玉富津



阿仁道路視察の一行（昭和6、笹森峠にて）

内村長一行も加わった。桜庭時治の「想い出書」からその行程などを、示したい。

○午前四時二十分に役場前を出発、自動車五台に分乗。北嶋町長提灯をさげて見送られる。

○川堤着五時二十分、それより北秋の上小阿仁村中茂まで二里、九十九折の難路を徒歩。

○郡境笹森峠着六時四十分、携行の朝弁当を開く。

○中茂福田為吉氏邸で小憩、南沢の伊藤裕之氏が上小阿仁村を代表し先導役として出迎えられた。

○七座営林署特発の森林軌道に乗り八時半発、緑の溪間を走らせて南沢着。

○南沢で乗替え沖田面へ。山田貞吉氏邸で部落総出の歓迎を受けて暫く休憩。

○小沢田へ十一時着、世話役は田口重蔵氏、小沢田小における歓迎会に臨み上小阿仁村長畠山吉太郎氏並に村内有力者多数と両郡の提携を約し交歓する（略）。

○小沢田を午後二時過ぎ発（略）梶田事務所に七座営林署長を訪ねる。

○根田から落合村杏台まで徒歩（略）。

○杏台から自動車で一気に溪后坂へ（略）阿仁道路改修促進期成同盟会を結成、その実現に決議を挙げた。

○（略）二ツ井駅より汽車で帰途に就く。参加者 鈴木喜太郎・小玉孫三・坂谷八十治・北島孫治郎・田口耕市郎・今村冬蔵・根田忠岐・長谷川専治・斎藤芳次郎・桜庭時治・加藤淀吉・二本敬治・小森敬一郎・鍋谷鶴治・長谷川敬助・小森四郎・宮腰友治・今村勘太郎・川村儀兵衛・柳原金太郎・鍋谷由治・和田喜代吉・村上確郎・畠山

川堤からは悪路がつづき、峠では歩くのがやつという状態であった。ところが、北秋側では森林軌道が走っていて、道路もよかった。この見聞が後に杉沢などの軌道と阿仁側の軌道をむすぶ計画となり、そこから一米線鉄道の突破口にしようということになったが、実現はしなかった。この視察で、行きどまりの阿仁側の人びとも、峠をこえた中央への近い道を待望しているのを肌で知った。

行きどまりの意識は、馬場目や富津内の奥地では山の彼方へのあこがれをかきたてる。内川も行きどまりを打開しようとして、松山・能代へ通ずる山本郡への郡道の道路改修を早くから運動していた。特に村長工藤東衛が熱心な運動をしている。行きどまりから抜け出そうとして道路を通そうとすると、その道すじは古代・中世・近世とつづいてその後すたれてしまい忘れられてしまった道であった。このときから世論は急に勢いをまし、八月一日稗田知事は笹森峠を阿仁側から馬で越えて踏査した。病気の稗田知事の踏査行は異例であった。五城俱樂部での歓迎会で、五城目・米内沢線を産業道路として七年度に着工することを知事は約束した。

しかし実際に着工するまでは、なお曲折があった。知事来町一カ月後に満州事変がおきて、国の補助金に不安が出てきた。さらに民政党若槻内閣から政友会犬養内閣となる政変で、知事もかわって内田知事となった。前任者の約束は反故に等しい。関係者の落胆は大きかった。しかしまた、一二月になると政府は東北北海道地方冷害の農村救済のために預金部資金五千万円融資を決定して、救農土木の中に阿仁道路改修が組み入れられるかも知れないという、望みも出てきた。

いく度か絶望のうわさが流れたが、重ねられた陳情が奏功して七年七月の臨時県会で産業道路として改修することに決議された。工費二万二千五百円、富津内地内全線・郡境笹森峠まで、失業救済事業として九月着工となった。明治

三二年最初の改修以来、三十数年後再度の改修となったのは、皮肉にも冷害のおかげであった。

この年度は、川堤と峠の間点でおわった。着工してみると山を割る個所が数カ所あることと、川堤橋はコンクリートにする必要があることが明らかになった。関係町村は、工事継続をさらに当局に働きかけなければならなかった。しかし、わが国は戦争のドロ沼にはまりこみ、数年後には未完成のままに工事は捨てられ、峠道を自動車を通れるようになるためには、戦後の二八年夏まで待たなければならなかった。

さきに、阿仁と杉沢の森林軌道をむすぶ計画にふれたが、阿仁の森林軌道と五城目軌道をむすぶ計画、杉沢と仁別の森林軌道をむすぶ計画も関係者の間に話題に上った時期があった。

八（一九三三）年秋田営林局は、北ノ又に森林軌道を敷き、秋田・仁別と杉沢とを軌道でむすぶ計画をもっていた。馬場目岳の下に四百メートルのトンネルをうがつと五城目と秋田は鉄道でつながる。森林軌道は郷土の人びとの期待と希望を集めた。

仁別・杉沢をむすぶ軌道は、仁別側から工事がすすめられ銚子口をすぎて次第に境界に近づいていた。境界水無口トンネルが完成して北ノ又に軌道がとどいたのは、一一（一九三六）年のことである。皮肉にも五城目の奥地が森林軌道によって、ストリートに県都秋田市とむすばれたのである。

これによって馬場目国有林の杉原木は、大量に秋田貯木場へ運ばれるようになった。北ノ又・仁別・秋田間の軌道線には機関車が入っていた。秋田・仁別間は台車一二両、仁別・水無口間は六両、そこから北ノ又までは地形が険しいために三両しか引けなかった。この線で力のあるガソリンカーが活躍するのは、一四年ごろからである。

奥地の森林軌道の歴史をみると、その最初は六年に千日に五千八百メートルの手押し軌道が敷かれている。北ノ又から杉沢、そして五城目へと軌道が延長されなかったのは、北ノ又へ丸太を出しさえすれば、そこからは流送できたからである。また、恋地・水沢間にある標高百六十三メートルの荷背峠をさけて、七年に馬場目川におちこむ崖にそって保

呂瀬沢入口まで併用林道が開通していたから、杉沢貯木場からは馬車で五城目まで搬出できたからである。

しかし、仁別・北ノ又線は保守がむずかしく、境界付近やトンネルの付近は使用できなくなってきた。そこで、原木の搬出量を増すために一六（一九四一）年から一七年にかけて、北ノ又・杉沢線五〇二六メートルと北ノ又支線手押し軌道一八四一メートルが敷かれ、運材の流れはすべて五城目に向かうようになる。この後、落合からの大倉又線は一八一年一六三〇メートルが敷設されて、森林軌道は奥地開発に活躍するが、郷土の鉄道にしようとする夢はついに夢のままにおわってしまった。

また、山間部の村の不況対策として、製炭振興が企てられている。五城目営林署では、一〇年に中津又・杉沢・恋地に工費四百円ずつで木炭倉庫各一棟を建てた。それぞれの地区では倉庫をもとにして製炭実行組合を作り、共同で販売することにした。結成された組合は、落合（理事長畠山政治）、高千（同小玉孫三）、杉沢（同石川平蔵）、恋地（同佐々木岩治）である。さらに、営林署では広葉樹製材工場を北ノ又に設ける計画であったが、七月に秋田に決定した。軌道で秋田と直結したからである。

組合化と振興策

郷土の人びとは、不況にただおしひしがれていたのではなく、その中にいながら、忍耐づよく時期をまち、その間に産業基盤の整備につとめてきたことは、すでに記述してきたとおりである。そうした施策に、農業倉庫と病院の建設がある。

農業倉庫は五城目販賣購買利用組合によって建設されたが、組合は五城目・富津内・内川・馬場目・馬川の五カ町村をその区域として六（一九三一）年五月一〇日に創立総会を行なっている。理事長北嶋卯一郎、専務理事近藤泰助、理事渡辺徳太郎・菊地鶴松・鈴木喜太郎・館岡斌太郎・佐藤房太郎、監事松橋慶吉・大石安五郎・荒川権太郎が役員となっている。総株九二〇口・組合員二五一名で、自作農と地主による組合として発足している。

組合の事業は、共同購入・共同販売をすることが主体であり、そのために五カ町村連合農業倉庫の建設が急務であった。八月八日に倉庫建築工事入札が行なわれ、九千四百円で落札している。また、軌道では倉庫から直接米の積出しが出来るように、駅構内の線路を変更する計画を発表した。

農業倉庫が鶴ノ木三七番地（新畑町）に完成し落成式をあげたのは一月二九日のことであった。倉庫は五城目駅構内に接して建てられ、移出米積出しの上屋つきのホームまでつけられていた。奥行一七間・間口八間・本倉庫建坪一二六坪・煙蒸室五坪・事務室等二二坪・木炭倉庫四六坪・外に藁工品倉庫・同作業場が付属している県内でもまれな倉庫であった。この倉庫には一万五千俵の米と五千俵の木炭が保管できたが、組合の扱った移出米は約二万石・五万俵にのぼった。木炭は馬場目六〇万貫（一五万円）、富津内四五万貫（一一万円）、内川四五万貫（一一万円）の産出となっているが、その大部分を実行組合との提携によって扱っている。

この組合は、「産業組合法」による組織であるが、後農業会となり農業組合となった。移出米には一俵一俵俵の上にさらに薄手のムシロをかけ、五城目のマークをつけて貨車に積みこむ様子や、次々に馬そりで運びこまれる米俵など、不況とはいえ駅の付近には意外に明るい活気にあふれていたものである。

産業組合法による医療組合をつくり、それによって総合病院を開業したことも、大きな事業であった。当時の農村の劣悪な衛生状態と医療に対する無知と貧困は、住民の手による病院をつくるころからはじめなければ救いようがなかった。湖東時報の七年元日号に薬局を経営する今村久蔵が、「設備の完全な病院がほしい」と書いている。

そのころの医療機関は開業医だけで、手術や入院となると秋田まで出ていかなければならなかった。貧農の多かった農民や貧しい職人や職工の多かった町の人びとにとって、医者にかかることはぜいたくであった。医療費は人びとにとって高かった。

湖東病院開業の直前、医師会は診療費の値下げなどをふくめたサービス改善をして、対抗策を講じている。一般開業

医にとつては総合医療機関の出現は大問題であった。

八月三〇日病院建設の第一回協議会が北嶋町長も出席して開かれ、病院の経営は「医療組合」を設けてそれに当ることと、組合への出資は一口五円とし二千口を付近七カ町村から募ることなどを決めた。この後、畠山松治郎が詳細な計画を新聞に発表し、「大衆の出資による大衆のための医療施設」の必要をキャンペーンした。世論は周辺の村からも盛りあがってきた。一〇月に入つて発起人に鈴木喜太郎（助役）・近藤泰助らがなつて、設立趣意書が発表され事務所が軌道会社内に設けられた。

八（一九三三）年六月一日、八カ町村二千五百人の組合員を集めて「有限責任五城目医療購買利用組合」が開業した。病院は川原町三浦医院跡、入院室は新町米田宅であつた。一方では病院建築が新町近藤泰助の屋敷の一部を敷地にしてすめられていた。七五〇坪の新病院が竣工して移つたのは一〇月一〇日であつたが、それまでの患者延人数は一万九百人・総収入六千九百九十余円であつた。いかに病院が住民に待たれていたら、わかる数字である。

初代院長医学博士佐藤豊雄、医師前田清・武田七郎・近田幸雄で、内科・小児科・外科・産婦人科・皮膚科・眼科・耳鼻科・レントゲン科があつた。役員は、理事近藤泰助（組合長）・今村久蔵（専務）・鈴木喜太郎・渡辺松治郎・畠山松太郎・館岡斌太郎・伊藤竹治・畠山周吉・斎藤岱之助・小玉孫三・顧問北嶋卯一郎・菊地庄之助・渡辺徳太郎・渡辺彦兵衛である。湖東部唯一の総合病院湖東病院が誕生したのである。この病院の最初からの地域での任務は、現在もかわらずにつづいている。

不況を克服する努力は、町の商店でもつづけられていた。六年の冷害の年は、商店の売上げはみじめな状態におちこんでいる。努力の例として、小池町商店会を紹介しておきたい。

小池町の商店主たちは商道会という親睦会を組織していた。町のメインストリートに店舗をはる商店主たちは、それなりのプライドをもっていた。商店街が雨が降つたあとは泥田のようになるありさまに、道路舗装をしたいという話は

八年ごろから月一度の例会を開くたびに出るようになった。そして、その年の暮れに、県土木事務所の係官をよんで話をきいてから、計画は一気に具体化した。アスファルト舗装は割安にでき、工事には県の補助金が出るということであつた。

ところで、田町にも舗装計画があつた。田町の通りは夏でも乾くことがないという、町一番の悪路であつたが、製材工場への馬車がひっきりなしに通るという交通量の多い道路であつた。また、阿仁道路の五城目の出入口にも当り、富津内・内川に通ずる道路であつたし、重要な官庁である営林署があつた。田町の町内では、毎年交付になる納税奨励金を積立て、工事費の半額を負担してでも、という意気込みであつた。

小池町の舗装設計ができたのは、九年三月一五日宮田日新堂で開かれた商道会例会であつた。幅一〇メートル・長さ一〇〇メートル・工費三千二百円・坪当り約一二円で、受益者負担はその中千円であつたから、大きな商店の並ぶところとしては苦にならない金額である。

田町の工事は、常演寺前から戸村堰橋までで、橋はコンクリート橋にかけかえることになった。工費は四千八百円余で、六月末に、工事は両町同時にはじまつた。

約一カ月後小池町通りが竣工し、八月一日これを祝つて道路祭が行なわれた。わずか一〇〇メートルでも、郡内第一号の舗装道路であつた。田町は橋をのこして八月半ばに工事がおわつた。橋は工費五〇〇円で九月末に完工した。

ところが一冬がおわると田町の道路の破損はひどく、軟弱な地盤のため路面も側溝も大半がこわれていた。そして五年もたつともとの悪路になっていた。ただ、橋だけは今日もびくともしない。小池町は破損もなく、雪どけには子どもたちのコマまわしの遊び場になった。

五城目商工会主催の観桜会も景気回復策のひとつであろう。森山に桜と芸妓をあしらい「桜花満開」の文字を配した色刷りポスターを、秋田・能代間の各駅にはつた第一回観桜会は、一〇年四月二八日から五月二日まで開催されている。

期間中軌道は往復四割引きのサービス、手踊り・仮装行列・相撲・花火の行事があった。会場は雀館と矢場崎である。いずれも、工藤市太郎の植樹した桜の木が、いつばいの花を咲かせる郷土の名所であった。

農学校と新聞

義務教育が四年から六年に延びたのが明治四〇年、大正年代になって義務教育がようやく地について、女子の就学率も上昇してきている。大正期は中等教育の充実が問題になってきた。県は大正二年から県内各地に男子女子の中等学校・実業学校を計画的に設置している。

大正一四（一九二五）年の県会でひとつの意見書が採択された。南秋田郡土崎港町に県立農業学校を設置すべしというものであった。しかし、同町は町の性格から農業学校はなじまないとして誘置に消極的であったところから、郡内の他町村がこれをめぐって動きがにわかに活発になってきた。

宮田礼蔵町長は早速県に働きかけ、農業学校誘置によって町勢振興の土台にしようと考えた。これに呼応して、町民も町議白土清佐らを中心に五城座で町民大会を開き、誘置を決議した。しかし、一部の「親方衆」とよばれる有力者は消極的であった。誘置のために土地と校舎を寄付するなど、もつての外という空気が強かった。町議会は、このムードを反映して誘置を決議するに至らなかった。

鉄道誘置のときと同じように、執行部が独走して、議会が最後にブレーキをかけるというかたちになった。しかも、その理由も同じで、土地と校舎（駅舎）の提供反対であった。

農業学校建設地は、広い土地を提供するという金足村に決まった。三年のことである。五城目町はその決定まで、なにもしなかった。これは、歴代理事者が鉄道・駅のない不利な条件の下で、町勢振興に努力してきた実績を捨ててしまったような、鉄道問題につぐ痛恨の失敗であった。

逃がしてしまった農業学校にかわって、本線のかわりに軌道をつくったようにといっても、同様にまことに苦々しく



湖東時報（創刊号）

貧しいことだが、五年四月に町は「実業専修学校」を開校した。普通科・本科・専修科があり、普通科は男子夜間部、本科には男子部商科・農科と女子部をおき、専修科は女子だけである。在学生数（昭和五年六月）は次のようになる。男子部商科一七名・農科二七名、女子部一年三七名・二年三三名・専修科一三名、合計一二七名である。

町当局も町の人々も、専修学校がやがて中等学校に昇格していくだろうと期待していた。ちょうど一米線の運動が成功するだろうと思ったように。しかし、秋田市をひかえた場所に中等学校を設けるなどは、甘い

考えであった。そして、七・八年ごろになると不況にいためつけられて学校予算を町費でまかなうことが大きな負担となり、しばしば廃校が町議会の話題となった。大成を忘れ小成に安んじる郷土の保守性が、学校問題で一挙にふき出したようであった。

町の青壮年の中には、こうした町の空気をどうしたら変えることができるかと心配する者も出てきた。「大成会」のグループもそのひとつであった。長谷川農蔵（敬助襲名）・笹尾長・菊地鶴松・畠山松太郎・菊地米蔵・斎藤貞・福田讓藏（松之助襲名）・渡辺道蔵・川村儀兵衛・宮田御代蔵・安東斌がそのメンバーで、初めは貯金積立と親睦の会であったが、農業学校問題の失敗に刺激されて、町の前途に対する自覚や町政への批判を語りあうようになった。会員は後で町長や町議になった人たちであった。そして、自分たちの主張を発表できる新聞を発行することにした。

新聞は三三歳の桜庭時治を編集発行人として、五年六月一日に「湖東時報」の創刊号を発行した。その一面には長文の宣言がのっているが、それには「本紙は五城目を中心として湖東諸町村の報道文化の任を負い、産業の協力発展と郷党団欒親和的自治の刷新を唱導し、厳正批判を以て世論公正を運用の衝に当り——」とあるところを見ると、単なるニユース中心のローカル紙ではない。

この新聞以前に、大正一〇年二月一日「羽城新聞」が発行されたが、本格的な新聞として定期発行が守られ長くつづいたのは、「湖東時報」が最初である。新聞は七百から八百部を刷って、月二回発行、一部五銭であった。そして、町民の支持のもとに二三（一九三八）年六月二〇日一九二号まで八年間つづけた後に終刊している。

小さなローカル紙ではあったが、「湖東時報」は阿仁道路運動・奥地開発・馬川合併・湖東病院問題などを提唱し論評し、町勢振興の世論を盛りあげた功績は大きい。

中等学校問題にはおくれをとった町であったが、幼児教育では非常に進歩的であった。「町立五城目幼稚園」が開園したのは、六年九月一日のことであるから、公立幼稚園として県内では最も早いほうであった。五年に町立専修学校を発足させ、その次の年に幼稚園開園と不況のさ中であるだけに、新しい自治体財政を圧迫する事業はひかえるようにというのが、監督官庁の指導であつたから、八月二八日の町議会は、北嶋町長への追及はすこぶるきびしいものがあつた。不急不要の幼稚園の施設に三百円余の町費をもち出すのに反対が強かった。義務教育以外に教育費がますますかさむのは、町財政にとって困ることであつた。

園規則には次のようなものがある。

○保育項目は遊戯・唱歌・観察・談話・手技等とす。

○園児の年齢は満四歳より小学校就学までとす。

○定員は百名とし、保育年限を二ケ年とす。

○保育時数は毎週二八時間とす。

○保育料は園児一人につき毎月金一元とす。

五城目小学校に専修学校と同様に併置した幼稚園は九月一〇日入園式を行なった。七〇名も応募したら成功といわれたのに男児五二名・女児五三名、合計一〇五名の園児が入った。職員は園長鎌田善雄五小校長、保母畠山ヤエ・赤田京・笹尾順・坂谷エンである。

満州事変がおわって九年の春に、郷土部隊が凱旋した。郷土の出征兵士が帰還したのは三月二七日で、五城目駅頭は歓迎の人びとに埋まった。事変がおわると、はかばかしくない阿仁道路改修よりも、鉄道建設に力を注ぐことに方針をかえた。一一（一九三六）年一米線期成同盟が結成されたのはそのためである。

会長北嶋卯一郎五城目町長、副会長北林庄作米内沢町長・伊藤市助一日市町長が就任したほかに、顧問に水野鍊太郎・田中隆三・町田忠治・中川重春・信太儀右衛門らの大物を並べた。しかし、この大物顧問は積極的な活動をしてくれない。ただ郷土を地盤としていた信太代議士に運動は逆に利用された様子が濃い。そうしたはつきりしない情勢の中で、やがて一二年日中戦争（支那事変）がおこり、大陸に戦線が拡大するに及んで運動も下火となってしまった。

戦争がはじまる

昭和一二（一九三七）年七月七日中国華北で戦争がおきた。「盧溝橋事件」とよばれた衝突が、やがて「支那事変」と名づけられた日中戦争に拡大していくなどは、郷土の人びとは考えなかった。しかし、五城目だけで七月中には二〇名、八月中には実に四八名という多数に、赤紙とよばれる召集令状が舞いこんで、人びとを不安にした。

戦争がはじまって早くも一週間後には、この付近の町村に第一回の召集令が一斉に入っているが、以来兵士の召集がつづいていた。駅は連日郷土から出発する応召兵を送る人波でいっぱいになった。このときから、戦争は長くつづき、

その間に入った召集令は約四五〇回に及んだ。

一二年中に国防婦人会・愛国婦人会が発足し、遺家族援護会が結成された。「銃後」ということばが流行した。ダイワン国防婦人会は、町や付近の町村から集めた梅漬一〇万粒を四斗樽一〇本につめてリヤカーに積んで秋田連隊区司令部に運びこんだ。内川村の一八歳の青年は血書をそえて献金して話題となった。

七月の開戦以来もつとも不幸な部隊は、県内の予備・後備役の召集兵で編成された歩兵第一一七連隊（柏崎部隊）であった。郷土からの召集兵もこの部隊にたくさんいた。部隊は九月華北に入り、一〇月西安作戦に参加したが、大きな損害をうけた。郷土出身兵では、一四日渡辺勇助軽傷、一五日一関重一重傷、二四日朝野忠治戦死、佐々木養之助・斎藤仁太郎負傷、一月六日伊藤兵治戦死、七日小鎌清七・小玉長次郎戦死、九日一関鉄之助戦死とつづいた。柏崎部隊は西安作戦で一〇月中だけで一五〇名近い戦死者を出していた。

戦死公報は一月二三日にそれぞれの留守宅に届いた。小鎌清七の戦死の状況は、新町出身の戦友渡部竹治が手紙で知らせてよこした。手紙には最後まで身につけていた皮製の袋に入れたお守りが同封されていた。しかし、その手紙がついたときには、親切に手紙を書いた渡部竹治本人も、すでに戦死していた。この第一一七連隊は一五年二月に復員解散している。

一三（一九三八）年には天候が順調で夏は暑く、豊作であった。この後は、人手不足や物資不足が影響するようになり、天候がよくても収穫量は漸減するようになった。一月五城目青年団では「郷土だより」という小冊子を作り、出征兵士への慰問袋の中に入れていた。

○日支事変の著しい影響を蒙ったのは鉄及び金工品である。我が町も湖東部鉄材使用者を一九とした組合を組織した。鉄材は各組合に一定量の割当があり、それを組合員に分けるので不便な点もあるが、一方では組合に軍部からの注文等もあつて、我が町でもこの注文を引受ける工場の建設が目論見られている。

○木綿類は純綿製品が製造禁止され、既成純綿品は政府が買上げをし、それを鉄工組合と同様業者を組織させて割当をなし、なおまた価格を統制し、その他木綿物には何分かのステープルを混入させ、純毛品もまた製造禁止となり同じくステープルを混入している。ゴム製品、草製品ともに製造禁止となつたので、俄然活気を呈したのは下駄屋である。今年は稲の豊作と米価高、木材木炭の騰貴によつて付近農村の購買力旺盛で、事変下にあつても常と変わりなく日用品等は却つて売れ行きを増している。

○木材は一般輸入材の使用禁止、制限と軍部納入品製作に大童となり、之に加うるに応召者も数名出し、又各軍需工場へ出稼等もあり、為に労働力不足を来たし多忙をきわめ景気頗る良好。一般労働者も非常に忙しく軍需品を製作する地方工場の建設は之に拍車を加え、我が町でも大工は十数名の出征者を見、それに出稼ぎ数十名あり、ほとんど町一般の需要を充すに足らず、人夫も人不足で多忙をきわめ、左官又然り石屋又然り、物価の騰貴と労働力の不足は之等一般の職人の景気をよんでいる。

○本年我が町は何等の災害もなく、常に晴天つづきにて米の出来振りもよく実り、木炭木材も高価にて、一般に軍需品景気を呈し、働く人は満州、朝鮮、樺太等にどんどん進出している。

○国を挙げての叫びである国民総動員運動の一として、我が町でも町内を一四区に分けて町内会を組織し、最近また五戸乃至一〇戸を一組に家庭警防組百数十組を設け、燈火管制、焼夷弾、毒ガス、爆弾の防禦演習に懸命である。○仲ノ小路に借屋住いをしていた信用組合は、一万数千金をかけた耐火建築の中におさまることとなり、町に美観を添えることになった。（略）

（郷土だより・昭和十三年）

日中戦争の前から軍需景気は始まっていた。例として、昭和十一年中の木材界の好況をおつてみよう。——近年に

ない好況に終始し、町産業中圧倒的生産額をしめて木材王国の名にそむかず製材十万石をこなし、百万円にもうひと息の概算九十万円の産額となった。木材業者大小十二名・五工場、「五城目木材」では製材六万石・原木二万石・売上五十三万円、「加賀谷製材」がこれに次ぐ実績をあげている外、他も前年に比し売上二割増となった。(略) 本年は待望の「百万円生産」を実現するものと思われる。原木の地場の産出は一割に過ぎず、九割は遠い所から仕入れるため、巨額な産額の割合にはもうかつていない。これは資源の乏しい運輸不便の本町業界にとって、販売競争の上で積年のなやみとなっている。ともあれ木材界は、木材の科学的用途の拡大につれ製紙原料・人絹原料に用いられ、さらに軍需の拡大と好景気を背負うとともに、全国的な思惑買込にあおられ張りきっている。本年は本町木材業の記録的飛躍の年となりそうだ。

〔湖東時報〕昭和12・2・5の記事の要約

その頃、加賀谷製材の経営者加賀谷直治は「私の工場一つでも、一か年に地元を支払う労賃だけでも四万円からある。五城目木材でも八万円程の賃金を地元へ落しているはずだ。これが直接間接に町に及ぼすものは大きい。五城目は木材と酒で百五十万円の産額をもっている。町産業の振興は、木材と酒を中心にして計画すべきである」といっている。

十二年になって、景気はさらにのびた。ちなみに、十二年度の五城目町の予算は五一九三七円、一日市町の予算は三一〇五五円である。

軍需景気は家畜市場の馬の値段にも現われている。七月二十九・三十日のセリ市は地元産馬は最高二〇五円、最低五〇円、平均一〇九円、売り上八六五〇円、二割強高の軍馬景気だった。(略)

こうした好景気ではあっても、町税の滞納は多くその徴収にはくふうが必要だった。五城目では税金完納者に、福引券をおくって納税を奨励している。(略)

戦争初期の物価・賃金

	昭和12年夏	13年秋
	3円40銭	4円37銭
靴	90	1 25
び	18	26
ス	90	1 80
目	12 80	13 80
俵	10 50	12 50
俵	1 80	2 20
坪	1 30	1 80
日	1 50	2 00
"	90	1 20
"	45	60
長		
た		
オ		
ン		
貫		
1		
1		
1		
米		
糖		
並		
板		
工		
官		
雇		
雇		
ム		
下		
糸		
1		
毛		
く		
玄		
砂		
杉		
大		
左		
男		
女		

(軍

需景気「広報五城目」昭和47・5・15)

事変がおきて一年余、人びとは大陸全土にひろがっていく戦線に、もうすぐ戦争がおわるだろうなどということは考えなくなっていた。もうこの時点で物資不足がはじまり、政府の強い統制が地方にまで及んでいるのである。

その中で、経済産業を刺激され、戦時インフレの傾向を示すのに、職人も農民も商店も好景気をよろこんでいる。人手不足の現象がおこりはじめているのに、軍需景気はこれまで慢性的につづいてきた不況を吹きとばしたかにみえる。ところが、その足元には、物価の高騰や必需品の品不足と

いう不吉な影がしのびよっているのを見おとしてはなるまい。いつの間にか戦時色は強まる一方であった。

「郷土だより」にある国民総動員運動というのは、「国民精神総動員運動」のことである。政府は国民全体を戦争にかりたて、「挙国一致・堅忍持久」のスローガンをかかげた。町は、①日支事変記念日を毎月七日とし、当日は禁酒と茶菓節約・朝五時半起床・神社参拝、②国民精神総動員貯金箱に貯金、などを決めたのは事変がおこって四ヵ月後のことである。

当時の加賀谷呉服店(小池町)の広告には、「防弾チョッキ・祝入営旗各種」というのがある。また、一二年一月一六日から一週間、東北地方初の防空演習が行なわれている。各町村は、急いで「防衛規定施行細則」「警備防空計画書」を決定、五城目署管内一〇ヵ町村の防空協議会を開き、秋田連隊区司令部の指示をうけた。そしてこのとき、各町村に防衛団を設立している。町長を団長とする郷土防衛組織である。

戦時下の生活 一二年八月三〇日午後、三時間程この地方に猛烈な集中豪雨が降り、馬場目川の橋のほとんどは流失した。

流失	昭辰橋	五三 m	久保橋	四〇 m	坊村橋	五一 m 中三〇 m	杉沢橋	四二 m
	中屋敷橋	二六 m 中一八 m						
	門前橋	広徳橋	北ノ又橋	高瀬橋	蛇喰橋	落合橋		
陥没	馬城橋	五五 m 中四〇 m						
	田畑の浸水	五〇町歩						
堤防欠壊	一〇カ所							

北ノ又橋・馬城橋は県道であったが、他は町村道であったために地元町村はその復旧で苦しんだ。二年に新設した昭辰橋は六千五百円の予算であったが、そのうち千四百円を加賀谷直治の外、小池町・御蔵町・仲町・米沢町の有志の寄付、県補助三千六百円、町基本財産から千五百円の負担となっている。

馬城橋の復旧は仮橋が架けられたが、本橋工事は場所をかえるという県案であった。小池町・川原町小路のところに架橋してダイワン（昭辰町）の一部民家を移転して馬川方面に一直線の道を通すというのがそれで、このルートは近世の渡し場の場所であった。この案に、ダイワン住民は反対し、馬川村当局もこれに同調した。また、五城目側にも異を立てるものが出てきて、場所は以前どおりとなった。

しかし、橋から念仏車までの部分は新しい直線道路にすることを県は捨てなかった。今日の昭辰町の道路がそれである。新しい橋は、三万円の予算、長さ六〇メートル・幅四・五メートル半であった。コンクリート永久橋とするという計画は、一四年に完成したときは木橋になっていた。戦争拡大のために、鉄が不足したからであった。

一五（一九四〇）年六月から八月までの間に既成政党はすべて解散させられ、新政治組織として大政翼賛会が結成さ

れた。この年の夏休み中、五城目小学校では三年生以上の子どもたちが一週間の勤労奉仕作業をした。戦時色は教育において一歩早くその濃度をましていった。また、食糧不足が次第に深刻になり、特に砂糖が不足してきて菓子類はぜいたくといわれるようになった。百％輸入にたよるゴム製品は手に入らなくなり、地下タビ・ゴム長靴などが必需品ともいえる農民や労働者は大変困るようになった。

そしてさらに、一六（一九四一）年一二月八日の太平洋戦争突入によって、戦時体制はより一層強化され、人びとの生活は極端に圧迫された。町や村から働ける男は、根こそぎ軍隊や徴用にもっていかれてしまい、戦争末期には中等学校生徒、国民学校高等科児童の軍隊志願・工場動員・援農奉仕がつづいた。さらに、若い女子や残っている男子には徴用令が出されて、ひどい人手不足になった。田畑の手入れさえ思うようにまかせぬ状態であった。

当時の人びとの生活から、いくつか拾いあげてみよう。

軌道会社は上井河経由の大久保線のバス営業を一五年四月に免許され、六月には二三人乗りのバスを購入したが、バスは車体の後ろに釜のついた新バスであった。八月一三日から営業運転されたが、運賃三五銭であった。バス車掌は女性の新しい職業であった。ガソリンはのとききびしい配給制となっていたが、一六年九月には配給停止となった。

太平洋戦争が始まって一〇日後、麦と薯類の統制規則が出ており、二〇日には雑穀も統制されている。このころ、

医薬品・衛生材料の切符制もはじまる。

米は一六年一月三〇日以来通帳による配給になっていた。そして、一七年二月二日には食糧管理法が公布されて、食糧統制はなお一層強化された。米の配給は一人一日平均三合三勺であったが、配給量は年齢・性別・職業によって差がつけられていた。これに先立ち農家に保有米を認めるとともに、保有米を差引いた収穫はすべて供出しなければならぬという供出制度は、一五年度産米からはじまっていた。

味噌醤油の販売制限は一七年四月二三日にはじまり、木炭の生産割当や馬の生産統制もこのころにはじめられている。

六月には菓子類・乳幼児用ミルク、七月三〇日には家庭用石鹼が配給制となり、八月四日蠟燭、八月一八日砂糖、九月一二日自転車・リヤカー、九月一五日トタン板・ブリキ板、一〇月一日わら・工品、一〇月一〇日ゴム履物、十一月一七日農機具・農薬がそれぞれ統制配給となった。この矢つぎ早の統制をみると、それが生活物資の全般にわたっていることがわかる。しかもその時期が、太平洋戦争のはじまつ一年程後である。このことからしても、一年で戦争の帰結は明らかであつたといえるであろう。

衣料の配給制について、少し詳しく書いておこう。一七年一月二〇日商工省令第四〇号で「繊維製品配給消費規則」が公布され、「衣料切符」制がはじまつた。商工省発行の衣料切符は甲種・乙種があり、それぞれ八〇点と百点となっている。地方町村は甲種八〇点である。有効期限一年、老若男女の別なく一人一冊、家族間の融通は認められていた。切符制は二月一日から有効となつたが、食管法はこの二〇日後に公布されている。切符が使えるようになるまでの二二日間、買いだめを防ぐために各種衣料を凍結状態にした。町内の数多い呉服店・洋品店は、そのために休業状態になった。買いだめは防げたが、店側が品物を蔵の奥にしまいこむのを防ぐわけにはいかなかった。

一五年七月七日の「七・七禁止令」とよばれた「奢侈品製造販売制限規則」が次第に強められて、町の商店も職人も一七年前になると前途が暗いものを感じられていたところに、呉服店などが自由に商売できなくなるといのであるから、町の商店街はさびれる一方であつた。

一七年はまた、輸送統制が教化され、バス事業と貨物自動車運送事業が、それぞれ統合されるようになった。これによつて、トラック事業は秋田地区に秋田中央自動車貨物株式会社が発足し、五城目の業者は統合されてその営業所となった。バス事業は、一八（一九四三）年六月二六日秋田中央交通株式会社が、五城目軌道株式会社を中核として南秋田郡・秋田市・河辺郡のバス業者を統合して設立発足している。今日の「秋田中央交通」は、このときからはじまるのである。「五城目小学校沿革誌」の一六年一〇月三一日の条に、「歩行会、全校児童行軍実施」とある。同様に一七年一月二二

雪中行軍、五月七日開校記念体錬会などと書かれている。小学校でさえも、遠足は行軍であり、運動会は体錬会となつて、小学校まで軍隊化しているのである。下山内国民学校の一八年度努力事項には、「時局下興亜教育の徹底に強く意を注ぎ、関係学年には義勇軍選出、海軍志願、軍作業庁、軍需工場就職等、職業指導の計画的積極的教育的施設を促進せしむ」とある。

子どもたちは援農作業のほかに、木炭搬出・山菜採り・薪搬出、イナゴとり・ドングリ採集・落穂ひろいなどに、連日「出勤」しており、一九年春には、矢場崎グラウンドを全面的に開墾し、カボチャ・大豆・馬鈴薯・ヒマなどを植えている。五城目小高等科二年男子四〇名は、一月一五日から二〇日間、馬場目奥地光沢鉱山に「学徒勤労報国隊」として臨時動員されている。

このころになると、物資の欠乏はひどくなり配給物資も超不足し、配給制度も有名無実になった。木造船建造のために、事もあらうに鎮守の巨木を伐るようにもなつていた。人びとは食糧を自給するために、家のまわりから山の斜面にまで畑を耕しはじめた。町内会・部落会単位に木炭の搬出作業やその他の作業に一般の人びともしばしば動員され、家庭菜園からのヒマの供出も命令されたりしたが、特に松根油をとるための松の根掘りはつらい仕事であつた。それに出動する郷土の人びとは、ほとんど女であり男といえば老人だけであつた。残つた男たちは、洋服屋や商店主・菓子屋など、みんな炭坑や造船所などに徴用され町をはなれていた。

一九（一九四四）年サイパン島陥落によつて、一月二四日からB29による本格的本土空襲がはじまつた。そして二〇（一九四五）年五月一〇日・七月一日の二夜にわたつて東京都第一吾嬭国民学校の疎開児童がやつてきて、珠巖院を宿舍とした。秋田県内は七月一五日・八月一〇日に米軍艦載機による昼間の銃爆撃を受けた。もうこうなつては、野良に出ることさえ危なかった。鉄道に近い大川国民学校は、機銃掃射によつて被弾し、列車と鉄橋が爆撃されて列車は立往生し、踏切近くの田にはロケット弾による大きな穴があいた。八郎湖上にとまつていた大型飛行艇は、たちまち炎上した。

釜石への艦砲射撃の音が聞えた日もあったし、青森空襲に向かうB29の大編隊の爆音が、郷土の星空を次々に過ぎていった夜もあった。二〇年度の下山内小沿革誌の経営要項・重点事項は空欄となっている。前線も銃後もない苛酷な戦争のまっただ中で、学校も生活もなにもあったものではない。三月には五城目幼稚園が廃園になったのも、そのためである。八月一四日夜の土崎空襲は隣町のことにように郷土の人びとにみえた。だれの目にも戦争の帰結は明らかであった。敗戦を迎えても、混乱より虚脱のほうが先であった。

五城目町・馬川村の合併

暗い戦争のさ中で、一点だけ郷土の発展に明るい窓が開いたように感じられるのは、一七（一九四二）年三月一〇日の五城目町と馬川村の合併である。

五城目町政のバトンは北嶋卯一郎から、一四年八月菊地鶴松に引き継がれた。菊地鶴松は前述した大成会のメンバーとして、馬川村との合併を早くから主張していただけあって、町長になると長年の懸案であった馬川村との合併に全力をあげた。ちょうど、このころ政府は小規模町村の合併を促進していた。そうした国策もあって、合併は実現した。新五城目町の規模は、戸数一、二四五戸、総予算九万三千余円である。合併の前年の五城目町は戸数九一七戸、総予算七万六六三円である。

町民の世論と町当局がひとつとなって、懸案が実現したのは大きなよこびであった。町民はこれを祝福して、二日間にはわたり昭辰町の広場で連合盆踊りを催している。



菊地鶴松

女学校創立

五城目高校の前身である五城目実科高等女学校が創立されたことも、特筆されなければならないことがらであろう。

当時（昭和一六年頃）、中等学校に進むには秋田や土崎の学校に通わなければならなかったから、大きな負担を感じる者が多く、地元中学校設立の必要が叫ばれるようになった。町議会も「地元中学校を設立すべし」と議決したのである。

町の主だった者が県の学事課を訪ね、町の世論を率直に申上げ、その善処方を要望することになった。課長は熱心な方で町の実情に深い理解と同情を示してくれたが、秋田・土崎には中学校あるので、技術的にいって甲種中学校の認可は無理だろうということであった。ということは乙種の女学校ならば、どうにかなるのでは、ということである。

当時、五城目から県会議員は出ておらず、運動に不便を感じたが、県当局と打ち合わせ積極的な運動を展開するため、町長（菊地鶴松）・助役等一行が文部省に行くことにした。一七年三月二〇日の雪どけ頃であった。文部省では小沼洋夫氏（県出身）が、代議士では信太氏（当選挙区）が活躍しておられたので、両氏の御尽力により八田文部大臣に会うことができ、町内の実情をいろいろ説明して滞りなく陳情の目的を果たしたのであった。

当時は鉄道省に長崎惣之助氏が次官、男鹿出身の薄田美朝氏が警視総監をしておられたので、両先生にお会いして御援助をお願いした。（初代菊地鶴松遺稿集「女学校創立当時の苦心談」）こうした苦心があつて、現在の五城目高校が誕生したのである。

まず、手始めに五城目実科女学校建設陳情書を作り、同年一二月役場へ提出した。翌一七年一月（略）本町会に於ても満場一致で通過したので実科女学校設立問題は、やっと目の目をみたのである。（略）三月中旬県庁からの連結で、五城目町が直接文部省へ学校設立の書類を持参するようにと言ってきた。すかさず、町長菊地鶴松氏と私が上京し、（略）文部大臣、文部次官等に面会しお願いしたら、こころよく引受けて下さったので安心はしたものの、

なお念のため学務局長を訪ねて実科女学校設立の許可をお願いしたい旨を申しのべた。(略)学務局長は片隅の一米もある高さの書類を指して、これが全国から来ている学校設立の許可願いで、これを調べるのには、半年や一年はかかるから簡単に許可にはならないだろう、との事だった。瞬間、くらくらとめまいを感じた。(略)最早開校するばかりになっていると強調し是非とも許可をお願いしたい、許可になる迄は日参すると言って毎日陳情に出かけた。

昭和一七年三月三十一日、五城目町役場は電報で実科女学校設立の許可を受取り正式の許可証は四月四日に届いた。入学式は五月四日、このようにしてこの日が現在県立五城目高等学校の開校記念日となっているのである。

(大村仙福「実科女学校創立当時を回顧して」創立三〇周年記念誌『若鷺』五城目高校生徒会)

五城目国民学校には、五城目実業専修学校という乙種実業学校が併置されていて、当初はこれを実科高等女学校に切り替えることを、町当局は考えていたようであるが、文部省はそれを認めず、全て別個の学校として創設されたのである。従って専修学校はそのまま存置され、後に青年学校となった。

三月に認可を得た新学校には、まず学校長に国民学校長の小松冬操氏を兼任校長に発令、続いて土崎高等女学校から高橋四郎教諭、新採用に太田トヨ氏、松本ふみ氏が教諭発令を受けて、また生徒のいない学校に赴任した。(略)まず生徒募集であった。女学校開設ということで町内は勿論近郷からの応募があり、五〇名の定員に対し、四月からではあったが六〇名位の志願者が出た。(略)五五名の合格者を決定、五城目実科高等女学校第一期生が誕生し、五月四日の開校式を迎えることになったのである。

(略)五城目国民学校には、専修学校、実業補習学校(夜間部)、幼稚園が併置され、雑居世帯の国民学校で、一つの学園の様相を呈していた。その中に更に女学校が、新しく併置されるので、町当局は、五城目町は幼児教育から青年教育まで一貫した教育の施設を持つ町であると、誇りをもったものである。(略)

新学校発足の昭和一七年暮れ頃から、実科高等女学校の学則を改正して、普通の高等女学校に改め、専任の校長配置が計画されて(略)翌一八年の四月になって、学則の改正を実施して「秋田県五城目高等女学校」となり、修業年限二ヶ年の高等女学校となったが、専任校長の発令は見なかった。(略)新入生を迎え二学級になったので、従来の教室(筆者注Ⅱ西校舎二階の礼法室隣りの一教室)が不便になり、国民学校西側別棟新校舎の二階の階段側から、二教室を使用することになり、その奥の一室は、青年学校女子部の上級生が使用していた。

(中村清次郎「実科女学校設立のころ」前掲書)

一七(一九四二)年三月三十一日に設立が許可された町立の実科高等女学校は、郷土と湖東部一円の教育の上でのスプリングボードの役目をはたすのだが、回顧談のように、五月四日に開校し、翌年四月一日に高等女学校となつてからもなおしばらくは苦難の時代がつづくのである。戦争から戦後の混乱期であつただけに、それはいつそうきびしかった。設立認可証を紹介する。

秋普一〇号

秋田県南秋田郡五城目町

昭和十七年二月二十三日五発第五七号申請秋田県五城目実科高等女学校設置ノ件認可ス

昭和十七年三月三十一日

文部大臣 橋田邦彦印

町村合併と女学校の問題を解決して菊地町長は、馬川出身の館岡斌太郎に一八年一〇月その席をゆずった。館岡町長はわずか半年たらずで病に倒れたため、当時町の壮年層の指導者として頭角をあらわしていた渡辺綱彦がこれにかわった。

平和と民主主義——敗戦

農地解放

張りつめた心の拠り所を失った空虚に、どんな時代がやってくるのか予想のつかない焦慮と不安が加わった。しかし、肉身知人の兵士たちが間もなく復員してくると、それがどんな姿であっても、人びとは長く苦しかった戦争がおわったという安心が心を浸してくるのを知った。やがて、米軍が秋田県にも進駐してきて、司令部が秋田市におかれた。連合軍総司令部と軍政部から次々に指令が出されて、政治・行政・経済・産業・文化・教育等の全般にわたって、はげしい変革が行なわれる。財閥の解体、農地改革、追放令の実施が、その最大の変革であった。

農地解放とよばれる農地改革は、連合軍総司令部（GHQ）の指令にもとづいて二〇（一九四五）年一月二三日に政府から出された農地解放令によって行なわれた第一次農地改革と、その約一年後GHQの再度の指示によって二一（一九四六）年一〇月二日の自作農創設特別措置法と改正農地調整法の発効によって実施された、第二次農地改革とがある。第一次改革は、地主をなるべく保護しようとする政府の意図が露骨に出た不徹底なものであったが、第二次改革は徹底した解放となった。これによって特に不在地主や不耕作地主とよばれる農地所有者は、潰滅的打撃を受けた。農地改革によって、秋田県の耕地十二万町歩のうち七万町歩が解放され、自作地九一％となって長い間続いた地主制度は完全に崩壊した。そのときの在町の地主は一五〇名ほどであったが、本町五城目の地主には混乱や動揺はあまりみられず、急激な地主層の没落もありみられなかった。これは、地主層の多くが商店経営・製材業・木工業などの本業をもっていたほかに、山林所有者でもあったからである。農地解放によって地主階級が没落し、町が火の消えたようになったという県内の地主町とはその点大いに異なっている。また、村の大部分をしめていた小作人層は、軒並みに自作農となった。農地解放は小作人の解放そのものであり、農村における革命であった。

第一次改革では、まず町村の農地委員会の刷新が行なわれ、地主側と小作人側から平均して委員を出すこととし、その選挙を二一年三月に行なった。このときの農地解放令は、解放売渡しについて地主と小作人の直接交渉によって行なうものとし、委員会はその間に立って苦情を処理するだけのものであった。また、不在地主であっても保有地は五町歩まで認め、売渡し価格は全国平均反当田七六〇円、畑四四七円という、当時としては相当な値段であった。

二一年二月一日決定の金納小作料は、一石当玄米七五円、大麦二四円三〇銭、裸麦三六円三七銭、小麦四四円四三銭、大豆四三円八八銭であった。しかし、政府は改革に本腰を入れる気はなく、その内容も徹底を欠いたので、GHQは改革の徹底化を指示しその回答を一年後とした。第二次改革はその結果で、徹底的な農地改革となった。

第二次改革実施に当たって、県はその機関の整備を図り農地部を新設し農地課をおいた。まず作業は町村農地委員会の実地調査が二一年七月からはじめられ、農地の一筆調査が急いで行なわれた。農地台帳が整備されないと買収計画が立たないからである。このとき買収指定町村いわゆるモデル村として、五城目地域では下井河村（現井川町の中）が指定されている。買収期日の計画は次のとおりである。

二二（一九四七）年〓三月一日・七月二日・一〇月二日・十二月二日
二三（一九四八）年〓二月二日・三月二日・七月二日・一二月二日・一二月三日
二四（一九四九）年〓三月二日・七月二日・一〇月二日・十二月二日
二五（一九五〇）年〓三月二日・七月二日・十二月二日
二六（一九五二）年〓三月二日・七月一日・十一月一日
二七（一九五二）年〓三月一日・三月三十一日・九月一日・一〇月二〇日

二四年以降のものは、計画に追加されたもので、前後二三回となっているが、実際は六五回でおわったようである。しかし、はじめうちは六年はたっぷりかかる大仕事だと思われたのであった。

普 通 小 作 料

(単位：石)

	小作料 (昭和元～10 平均)		収 量	苗代小作料 (昭和 15)		
	契 約 高	実 納 高		上	中	下
大 川	1.10	1.07	2.70 2.80			
馬 場 目	.90	.82	2.10	1,450	1,200	1,100
富 津 内			1.60	1,600	1,200	
内 川	1.00	.92	2.30 2.60	1,500		
五 城 目	1.20	1.07	1.90		1,800	
面 潟	1.20	1.08	2.50 2.70 2.80	2,000	1,800	1,500

農地買収・売渡実績 (昭和 29.12.5 現在)

町 村 名	解 放 実 績			売渡実績	売渡未済
	買 収	管 理 換	総 数		
五 城 目	113.3 反	51.5 反	164.8 反	165.7 反	
大 川	172.7	64.0	236.7	238.3	
馬 場 目	88.6	22.3	110.9	112.8	
富 津 内	129.5	20.4	149.9	149.8	1.0 反
内 川	74.8	5.1	79.9	80.0	
(面 潟)	294.4	93.8	388.2	385.7	25.0

自 作・小 作 地 の 変 化

町 村 名	昭和 20.11.25 現在			昭和 27.12.5 現在		
	自 作 地	小 作 地	計	自 作 地	小 作 地	計
五 城 目	122.5 反	229.8 反	353.3 反	282.9 反	69.4 反	352.3 反
大 川	157.1	280.3	437.4	394.8	42.5	437.3
馬 場 目	187.9	125.4	313.3	297.6	17.8	315.4
富 津 内	208.4	171.0	379.4	348.9	31.0	379.9
内 川	141.9	104.7	246.6	214.2	32.9	247.1
(面 潟)	242.9	421.4	664.3	609.6	55.6	665.2

この時点を経境とした小作料の変化をみると、小作料は前述のように金納に一本化され、戦後インフレの中なのに異常に低くおさえられている。

農地解放のはじまる前の二〇年と、ほとんどおわた二七年の小作地面積をみると、いかにこの改革が徹底的に行なわれたかがわかる。

この作業がすすめられている途中で、いろいろな苦情が出されたが、その多くは農地を買いあげられる側からのものであった。農地委員会は法の精神にそってこれを処理したが、訴訟となったものもあった。

滑多羅温泉組合所有の田地二反九歩に関わる訴訟は全国でも珍しいケースのものであった。申し立ては、湯別当伊藤市蔵の手当として小作させていたもので、純粋な小作地でなく、従って解放の対象外であるというものであった。しかし温泉組合の敗訴となり、農地は解放された。

〔五城目町の歴史〕

時の流れを反映して、国有牧野解放の声が県内に高まってきた。もともとこれらの採草地・山林は、村や総や個人のものではなかったという考えが人びとにあった。二五(一九五〇)年一月二十四日秋田県国有牧野解放促進協議会が発足した。その発起人に馬場目村長兒玉孫左衛門・富津内村長阿部友次郎が名を連ねている。それだけ、郷土の国有牧野となつてゐる土地が多かったということがわかる。この運動は、二七(一九五二)年六月二〇日に県所属替牧野の完全売渡しの成果でおわるが、未墾地完全解放や山林解放という変革にまではすすまなかった。山林解放がもし行なわれていたら、郷土の経済状況はもっと変わつていたと思われる。

さきにも述べたとおり、農地の解放は革命的出来事であり、農村の様相を一変させた。さらにその内部の人間関係にまで、著しい変化をもたらした。また、この後の米作りへの意欲も自作農となつた農民の胸で大きく育った。生産性の向上と農村の民主化は、このときから大きくすすんだ。

民主主義

戦後、すべての価値が逆転して戸惑いと混乱を人びとが感じたが、一方で平和国家・文化国家の建設を合意することになった。二一（一九四六）年一月、天皇の「人間宣言」があり、戦争指導者の公職追放があった。追放は地方の各界にまで及んだ。戦時中の首長から無理にさせられた翼賛会支部・翼賛壮年団の役員にまで及ぶという徹底したものであった。このため、郷土でも指導者の必然的交替がなされた。

学校の教科書は、戦争・軍国主義などに関係のある部分を墨でぬりつぶして使用した。四月には男女同権により第一回の総選挙が行なわれた。女性も参政権を得たのである。九月には財閥解体の指令がGHQより出され、職場には労働組合の結成があいついだ。二二（一九四七）年度から「六・三制」とよばれる新学制が実施され、四月には国民学校初等科が小学校、高等科が新制中学校となつて五月一日に発足した。中学校は新制高等学校へ移行することになった。このときから、長い間つづいた義務教育六カ年が小中学校九カ年となり、地方自治体は中学校校舎の建築や教育予算の増大で悩むようになる。

六・三制をばむ物資や精神的原因の中には、まず教科書や教員の不足や待遇、素質などの条件がかぞえられるが、大きな原因として校舎、教室の絶対不足をみのがすことはできない。寺院、教会、物置倉庫、土間、玄関、民家、兵舎、雨天体操場、講堂、教員室などを改造したり、新制中学発足のため小学校の教室がくいこまれ、小学校が二部授業で補ったり苦心さんたんの状態である。

（社説「六・三制教育危機」『秋田魁新報』昭和22・11・22）

二七（一九五二）年十一月一日から県内の町村に一齐に地方教育委員会が発足。新教育がそれぞれの町村で徹底深化されることになったが、間もなく委員は公選から任命制となった。

二三（一九四八）年になると、二一年・二二年とつづいた戦後インフレが加速されて、天井知らずの勢いとなった。物価は戦前の三百倍というのもザラであった。物資不足とはいえ、金さえ出せばどんなものでも手に入った。ただ一般

の人びとに金がないだけで、貨幣価値は日毎に下落する一方であった。

物価統制令や食管法も生きていたが「闇」ということが流行し、闇商人たちが闇取引きをもうけていた。食糧不足は依然つづいて「闇米」を買うために一般の人びとの苦労は大変であった。「タケノコ生活」が一般の人びとの生活であった。

しかし一方ではインフレ景気によって、町の商店は軒並みに生気をとりもどした。木材業界、木工業界の復活はめざましいものがあつた。戦災復興の資材の生産に追いまくられフル操業をつづけた。その生産の拡大によって、名実ともに町の花形産業となった。木工業も戦時中一部で工場生産に切替えていたが、生産拡大によって木工工場が多くなった。五城目の経済は、基幹産業である木材業を中心として展開したといつてよいだろう。

戦中戦後の物資欠乏のときでも、五城目市は依然としてつづいた。あらゆる食料品、日用品が欠乏すればするほど、統制品でないものを市に人びとは求めた。戦後は闇景気を反映して市は活気を呈した。六回から一二回に市がふえたのも、そうした事情からである。市はなんといつても町の大衆と付近農漁村の大衆のものであつた。

木材木工業の驚異的な発展によって、当然これらの業者の発言力は強まり、町政への進出もめざましいものがあつた。二二年地方自治法公布とともに、地主階層にかわつて経済の主導権をにぎった業者の代表が、町政の舞台に登場してくるのは当然のことであつた。また、それは旧指導者層の追放によって、いつそう容易であつた。木材業関係の菊地米蔵、加賀谷力司が町長に、加賀谷直治・坂谷八十治が県議会議員に選出されたことは、その顕著な例といえる。また、町議会議員にも大量に当選するようになった。農村部では、地主階層にかわつて、新興の勢力が政治的発言力を大きくし、かつての農民運動を経験した人たちも復活した。

民主主義が徹底されるに従つて、人びとは身近かな政治に大きな関心をもつようになった。そのため言論も活発になった。地域の人びとの言論機関として渡辺彦次郎が編集発行人となつて「湖東公論」（後に「湖東新聞」）が、二一年五月

に創刊号を出した。青年・婦人層の動きも活発であった。二二年には各地に青年会の結成があいついだ。その中心となったのは、軍隊から復員してきた青年たちであった。これらの青年会の連合体である「湖東部連合青年会」(湖東青・初代会長加賀谷力司)もつくられた。会長となった加賀谷氏は、五城目青年会会長から後県連合青年会会長まで勤めていた。そうした意味で、郷土は青年会運動の中心であった。

婦人会は、二一年に五城目婦人会(会長北嶋久子)が発足し、各村でも結成されている。また、文化団体等も各地域に誕生し、はなばなしい活動をくりひろげている。各小中学校のPTAも、二三(一九四八)年五月二八日に五城目小PTA(初代会長斎藤芳次郎)が結成されたのをはじめとして、各校で結成されるようになった。五城目小PTAの結成が全県最初のPTAとなったのは、一〇(一九三五)年三月八日に発足した「保護者会」があつてそれまで活発な活動をつづけていたからである。保護者会は、渡辺彦兵衛の熱心な提唱によるものである。

戦災者や引揚者の組織である「戦災引揚者連盟」(会長笹尾長)は、会員の生活を守るために活動した。本町五城目だけでも所属する世帯は一六〇戸余であつた。労働組合も、物価高の中で経済要求をにかけて運動をひろげていったが、その連絡協議の組織である「五城目地区労働組合会議」(地区労Ⅱ初代議長小林忠之助)が発足したのは、二五(一九五〇)年九月であつた。

発展への始動

戦後の郷土での最初の建設的なできごとは、教育文化の面での県立高校の発足と、産業経済の面での阿仁道路の開通である。そのどちらも、基盤をかためるという意義の上で大きいできごとといえる。

五城目高等女学校は六・三制の新学制によつて、高等学校として二三年度初めに発足しなければならなかったが、規模の小さい町財政は二二年に新制中学校校舎を昭辰町に建てるだけで精一杯で、町立の高校を維持していく自信がもてなかった。女学校は小学校の体操場を仕切って教室にしているありさまであつた。新学制実施を期に、町立女学校を

そのまま廃校にした方がよいという声も少なくなかつた。

この以前の二一年九月父兄会が組織され、一〇月には「校舎建設期成同盟会」(会長分銅瑞穂)が結成されていたから、こうした情勢に対してはげしい運動を展開した。町立高校として財政危機を招くよりは、独立校舎を建築して県立高校に移管した方が得策ではあつたが、校舎の建設は大事業であつた。それでも、一応二三(一九四八)年四月一日五城目高等学校(校長加藤裕)として発足し、このときから男子も入学させるようになった。

私の肚は、欠場崎に五城目高校の独立校舎を建てることに、とうからきまつていた。(略)町にはいろいろな意見の人がいた。五城目町に高等学校など要らぬという人もいれば、高校の必要性は認めながらも設置場所について、田町方面、雀館、細越などの候補地を挙げる人もいた。これらの意見をどう調整していくかが問題であつた。設置場所については、(略)矢場崎以上の適地はないという自信があつたので、何とか説得できるとして、高校不要論には慎重に対処しなければならなかつた。肚のうちを公にする時期を誤つてはならなかつたのである。

二十四年五月、その時が来た。独立校舎を建てたうえで、高等学校を県に移管すべく働きかけることとし、そのた

めに必要な町としての負担など、熟慮の末に成算を得たのである。(略)

こうして、独立校舎は、生徒諸君の力で整地された所に建った。小学校の最も新しい棟を移動建築したもので、二階建六教室のこじんまりした校舎ではあつたが、ともかくも、私は生徒諸君への約束を果たしたのであつた。九月九日から、新校舎での勉強が始まつた。(略)

しかし、これで安心してゐるわけにはいかなかつた。この学校を県に移管するという問題が残つていた。教育振興が叫ばれている中で、高等学校の施設を充実させるには、町財政でどうにかなるというものでは



渡辺道蔵

なかったのである。(略)連日のように、当局に対して陳情やら交渉やらを続けた。そしてとうとうこちらの熱意が通じた。(略)こちらで申し出ていた条件は次のごとくであった。

①矢場崎の地一万坪を県に進呈する。

②五城目高等学校の施設拡充のため、むこう三年間、その費用を五城目町で負担する。

渡辺副知事が同情して、負担期間を二年間にしてくれた。私は印鑑を持参して、夢中で契約をして来たのである。やがて県議会でも承認された。(略)

(渡辺道蔵「県立五城目高等学校誕生」『若鷲』)

県立高校となったのは、二五(一九五〇)年七月一日であった。男女共学の湖東部唯一の県立高校の校舎の建築が完了したのは、二七(一九五二)年一〇月一日のことである。二二年四月二〇日に初代公選町長に当選して就任した渡辺道蔵は、地方自治法の下での最初の選挙で四月二五日に選ばれた町議会議員(議長加賀谷直治)と、最初にとりくだ難問が高等学校問題であった。しかし、この問題も期成同盟会の校舎建設基金募集などの運動や町民・地域民の世論の盛り上がりがあつて始めて解決できたのであった。

一方、木材業の高度成長に伴つて、町産業のより一層の拡大をはかるには奥地開発こそ急務であった。五城目の木材業の後背地は、馬場目川流域そのままに浅かったが、幹線道路を通しこれから林道を広げることによって、まだ開発の余地があつた。また、さらに阿仁部にその林産資源を求めることも可能であつた。そしてさらに、かつて一八世紀一九世紀にそうであつたように、五城目の商圏を峠の向うに拡大するという明治以来の夢を実現できるというよろこびもあつた。奥地開発の鍵は、阿仁道路(五城目街道)の改修であつた。改修によって自動車が越えられる峠を、切りひらくことが急務であつた。

明治三二(一八九九)年以来、地元が丸となつた運動によって改修工事は続けられていたとはいえ、それはさみだ

れたな工事で根本的改修でなかつたばかりか、戦争によつて長い間放棄された路線は、全くもとの木阿弥になつていた。ちようど郷土の要望が大きくなつたころ、県は阿仁田沢地域総合開発計画を実施する段階になつていた。幸いなことに阿仁地域から中央地区そして県都に通ずる産業道路が、その計画には入つていた。

阿仁道路開通期成同盟会(会長渡辺彦兵衛)の運動と県議加賀谷直治の尽力によつて、その計画の早期着工を決定させた。この道路の工事は、五城目側は川堤から、阿仁側は中茂から同時にすすめられ、五米線(五城目・米内沢間)とよばれるようになり、二八(一九五三)年八月一〇日に竣工した。この完成によつて、五米線は自動車の通れる道路となり、地域の産業開発の動脈となつた。五城目の露天商組合の人びとは、トラックを連ねて沖田面・米内沢の市へ商売に出かけた。しかし、険しい山地を開いた道路は、冬がくると交通は吐絶し、雪がとけると崖崩れや路盤が崩れていて、毎年のように改修工事を続けなければならなかつた。バスが割山峠(後に位置は少々ずれるが「秋田峠」とよばれるようになった)を越えて、阿仁地方と五城目を結ぶようになるのは三六(一九六一)年七月になつてからである。このころになると、道路が安定してきたからである。さらに峠道も舗装され、道路周囲の山々には植林され、その造林作業を記念した「空に青雲、山々緑」の碑が郡境近い峠の一角にたつてゐる。

このような険阻な道路工事の早期着工、早期完成を県にふみかせたのは、期成同盟会に結集した地域の熱意もさることながら、五城目の県政に対する発言力の大きさ、影響力の大きさのあつたことを考えないわけにいかない。二六年四月三〇日に行われた新制第二回県議会議員選挙で、五城目出身議員が一挙に三名も誕生したことがそれである。坂谷八十治・栗山蔵之助・加賀谷直治の三氏が当選したのである。このときから、南秋田郡選挙区の定員が一名増の六名になったとはいえ、その半分が五城目出身議員なのだから驚異であつた。なお、加賀谷直治は新制第一回の県議選(二二年四月三〇日)に出馬し当選している。そのような実績の上で、加賀谷直治は副議長に選任されている。

三人の議席は、郷土の政治力が飛躍的に強まったことを意味し、それが五米線工事の進捗となつてあらわれたのであ

る。この間に、五城目町長は終戦後の二〇年九月二十九日に就任した渡辺彦兵衛が追放によって退き、公選初代町長に渡辺道蔵が二二年四月二〇日に就任、つづいて二六年四月二三日には第二代の菊地米蔵が就任している。県議に当選した加賀谷・坂谷の両氏、町長の菊地と木材業者であることに、この業界の政治的実力の大きさが知れる。これは、戦災復興の景気から、二五年六月二五日にはじまった朝鮮戦争による「特需景気」へと拡大していく景気にのった、業界の経済力の大きさであった。

加賀谷直治は現職の県議会副議長のまま死去されたが、坂谷八十治は二八年九月一日に木材利用合理化研究のために渡米し、六〇日ほど各地を視察研究している。渡米視察が、このころからはじまり、その第一号が坂谷県議であったが、アメリカ土産の電気鉋が珍らしがられた。中央交通の社長の渡辺綱彦も、三四（一九五九）年六月一日に渡米し、国際ロータリー世界大会に出席するとともに、アメリカの交通事情を視察している。坂谷県議のときはプロペラ機であったが、渡辺社長のときはジェット機になっていた。このころが、アメリカばかりでなく海外へ旅行する流行のはしりとなった。わが国の高度成長が、こうした事象にはつきりと現われている。

二七年一〇月一二日に第七回秋田県種苗交換会が本町で開催されたが、これを機会に商店街や駅前一帯が一新された。この交換会の会場が南秋田郡に割当てとなったが、五城目と船川が猛烈な誘致合戦を展開した。

船川は保健所新設をとることで会場を五城目にゆずった。永久的な保健所と会期一週間の催し物とでは、実利をとった方がいいと船川側では判断したのであった。名をとったと思われた五城目も、それによる波及効果は計りしれないものがあつた。その第一は人々の心に自信が生まれたことであり、新しい町造りがスタートしたことであり、経済産業その他に大きな刺激となったことなどである。しかも、二八年六月三〇日には、秋田保健所五城目支所を開設し、二九（一九五四）年一〇月には五城目保健所として昇格している。名もつたし実もつたのである。これも町の政治的な発言力と結びつけないでは考えられない事実であろう。

〔五城目町の歴史〕

二七年から二八年にかけては、戦後の郷土の発展を約束する基盤がつくられた時期ということができる。県議三名をそろえた勢いはあたるべからざるものであつたというべきであろう。道路でいえば、五米線開通のほかに林道の建設がある。基幹道路ができて、そこから枝分れして林野に入りこんでいく林道や、道路と道路をつなぐ林道がなければその効果は半減する。林道の中でも、峰越え林道（スーパール林道）がその意味で大きな役割をはたすのであるが、その第一号が杉沢から萩形に通じる「萩形林道」である。町一丸となった運動が奏効して、二八年にはその竣工をみている。また、営林署では、林道のほかに森林軌道も新築延長している。北ノ又支線や大倉又線などがそれである。

これによって、奥地のブナ林などが伐採されるようになり、五城目の木材・木工業界では、広葉樹利用という新しい課題の解決に迫られた。そのため、二八年五月九日に協同組合が組織され木材人工乾燥場の発足となった。四月三〇日には林区署時代以来の所在地田町から、細越に五城目営林署が新築移転した。三四年一月四日に新築移転した五城目警察署もこの近くにあつて、細越一帯の変容はめざましいものがあつた。

二七年九月に畑町に開院した養老院森山荘は、この種の施設としては県内でも早い方で、郷土の福祉行政のはじまりである。反面、軌道会社創立以来本町にあつた秋田中央交通本社が、事業拡大とともに県都秋田市に移り、営業所となつたのは淋しい出来事であつた。だが、五城目をかなめとしたバス路線の発達はめざましかった。戦後の旅客輸送の花形はバスであつた。

五城目線 二五年七月、五城目・秋田直通運行（一日八往復）開始。三五年九月、三〇分間隔運行。三八年五月、二〇分間隔運行を始める。

馬場目・杉沢線 二五年二月一〇日、水沢まで運行開始。三一年一〇月一〇日、杉沢まで運行開始。

井川線 二九年一月一〇日、五城目・大久保間（坂本経由）の線を井内に延長。その後、飯塚駅前から大久保まで延長。（二五年八月の大久保線がはじまり）

新五城目町

町村合併 二八（一九五三）年一〇月「町村合併促進法」が制定された。これまでは、五城目・馬川の合併があっただけで、明治二二年の町村制施行の当時のままで六〇余年間歩み続けてきていた。戦後の大変革によつて、各町村はそれまでの規模をもつては自治体の運営が不可能といわれるようになっていた。

国・県の委託事務の増大、人件費・議会費等の増加、教育費や民生・福祉関係の事業への支出増など、インフレの波をかぶりながら小規模町村の財政は悪化する一方であった。そして住民サービス低下の傾向が強くなっていた。国は法律によつて町村合併を促進し、合併した町村への優遇措置によつてこれを切りぬけ、町村規模を大きくすることによつて自治体行政を安定させるようにしようとした。三一（一九五六）年九月までに、人口八千以下の小規模町村を合併して、全国一万余の町村を三千程にしようとするのである。

町村合併は、この当時自治体がおかれている状況からみて止むをえない措置であったとことを割りきしても、促進法が時限立法であつたことなどから、地元の意見や希望が盛り込まれたとは思えない。県試案とか国・県の指導という名目の下に天下りの面がないわけでもなかった。そのことが、対立や混乱を起こした点もあつた。町村にはそれぞれ異なる歴史があり、民情・産業経済・財政・地形などの特別な事情が伏在していることから、性急な合併促進によつて混乱をより大きくしてしまったところもあつた。

地域の人びとは、まず法律の研究からとりかかった。特に一般の人びとが大きな関心を示したことに注目する必要がある。いろいろなところでいろいろな人びとや団体から多くの案が出された。青年会では、郷土の未来について弁論大会をひらいたりした。

合併プランの基本的なものを『五城目町の歴史』から抜いて紹介しておく。

○馬場目川流域案 馬場目・富津内・内川・五城目・面潟・大川・一日市の二町五カ村案。この案に対する賛成がもつとも多かったようである。七カ町村案とよばれた。

○県試案 五城目・馬場目・富津内・内川の二町三カ村と、一日市・面潟・大川の二町二カ村との二つにまとめる。馬場目川流域二ブロック化の案であるが、これは賛成が少ないというよりも、かなり強い抵抗を感じさせた。

○湖東市案 馬場目川流域七カ町村案に、上井河・下井河を加えた大合併案で、湖東市を作ろうというものであつた。青年の中には、大きければ大きい程よいという意見があり、交通は環状の鉄道を敷設するなどという夢のようないことをいうものもいた。

これらの案に反応を示しながら、やがてそれぞれの自治体の意見や態度が方向を見出し、かたまってきた。それだけに、自治体間の利害の対立がはつきりしてきた。この段階での、五城目を中心とした動きをとりあげておきたい。

五城目町では町民が馬場目川流域を打って一丸とした七ヶ町村の大同合併を唱え、一部ではこれに上、下井河を加えて市制の実現を説くものもあつた。（略）町当局、町会議員これにこたえ、一年有余にわたつて大同合併の実現に向つて、終始歩調を乱さず一致協力したことは五城目町政史に輝しい一頁を加えたものである。この間、県試案として、七ヶ町村合併の理想は、四ヶ町村と三ヶ町村の二つに分割され、一時止むなく四ヶ町村合併連絡事務所（五城目、馬場目、富津内、内川）をつくつたが、町民はついに大同合併の希望を捨てることなく、二十九年の秋頃にはこれに応じて、大川村、面潟村が四ヶ村に参加する態勢となり、年を越えて一月には、六ヶ町村の協議により、六ヶ町村の合併決議寸前に至つた。これに先立つて、六ヶ町村では、当時孤立の状態にあつた一日市の参加を望むことになり、六首長が代表となり、一日市役場に於いて一日市の参加による七ヶ町村合併を懇請したが、一日市町は県試案に拠つてこれを拒絶した。一方面潟村は最終決議に至つて俄然分裂し、三ヶ町村派と七ヶ町村派に分れて村会

地区別人口（昭和40年）

地区名	人 口（人）			世帯数
	男	女	計	
五城目	4,243	4,470	8,713	1,806
馬場目	1,659	1,646	3,305	540
富津内	1,306	1,438	2,744	472
内 川	1,046	1,035	2,081	378
大 川	1,151	1,186	2,337	410
面 潟	552	597	1,149	211
計	9,957	1,037	20,329	3,817

面積と人口密度
（昭和35.10.1現在）

町村名	面積(km)	人口密度(人)
五 城 目	214.41	98.2
昭 和	77.44	283.7
八 郎 潟	15.61	535.4
飯 田 川	14.22	412.9
井 川	46.63	163.2

産 業 別 人 口（15歳以上）
（単位：人）

産 業		総 数	男	女	割 合
就 労 者 数（15歳以上）		9,088	5,191	3,897	100
第一次産業	農 林 業	4,736	2,105	2,631	59.1%
	水 産 業	623	488	135	
第二次産業	鉱 産 業	17	17	0	16.2
	建 設 業	433	401	32	
第三次産業	卸 売 ・ 小 売 業	1,024	802	222	24.7
	金 融 ・ 保 険 ・ 不 動 産 業	858	432	426	
	電 気 ・ ガ ス ・ 水 道 業	67	47	20	
	サ ー ビ ス 業	15	0	15	
	運 送 業	786	439	347	
公 務		307	253	54	
		214	188	26	

てて隣接している場所だけに、三カ町村案に賛成するものも多かったから、合併後も両派の対立は底流していた。そこから吹き出してきたのが、大川本村地区を分町して八郎潟町に編入したいという運動であった。この賛否を問うための住民投票は、三二（一九五七）年四月一四日に行なわれることになったが、これをめぐって分町賛成派と分町反対派の運動は激烈をきわめた。また、町当局も分町を阻止するために積極的な行動をとった。両派の運動は、次第にエスカレートし、狭い集落は昼夜の別なく騒然



大川分町問題投票日（昭和32年）

が紛糾し、更に数百の傍聴老が毎回議場に押しかけ、場内に暴言や弥次が飛び、警官が出動したり、事態は全く收拾がたいものとなり、一時面潟村の専決処分でもって、六ヶ町村合併の決議書類を県会に提出したが、三月になって、面潟村はついに脱落し、事態は更に三転して、五ヶ町村の合併となり、五城目、馬場目、富津内、内川、大川の五ヶ町村は、あらためて旧町村を廃し、新町名を五城目町として、三月三十一日をもって発足することになった。

『五城目郷土史』

〇（一九五五）年三月三十一日に誕生した。新町は人口一万九、七六一人・戸数三、二八五戸・面積約二一〇平方キロメートルの規模である。

一日市町と面潟村は合併して八郎潟町となり、上井河村・下井河村二カ村は新しく井川村をつくった。青年が構想した湖東市も、地域民の多くが希望した馬場目川流域大同合併もならなかった。その上、郷土では四カ町村（県試案）、五カ町村・六カ町村・七カ町村と、そのときでゆれ動いたために、余震がともなったのであった。

大川村では三カ町村派と六カ町村派の対立は、はげしいものがあつた。特に、大川本村は一日市町と川ひとつをへだ

とした空気につつまれ、横断幕・看板・プラカードが並び、連日両派のデモがくり返された。警官も動員されるありさまであった。しかし、投票の結果は、分町賛成の得票が法に定めている数を上まわることができなかった。

大川の分町問題が住民投票によって解決したところ、こんどは逆に八郎潟町に合併していた旧面潟村の浦横町・岡本・野田の地区で、五城目町へ分町編入したいという運動がおきていた。地区の人びとは、分町の決意をはっきりさせるために、三二年四月一日二日の二日間での子弟一四名を、五城目小学校へ集団転入させた。

この住民投票は三三（一九五八）年三月三十一日に実施され、その結果四月一日から浦横町・岡本・野田の地区は五城目町に編入された。これで町村合併をめぐった紛争や対立は一応の決着をみたが、人びとの心にのこった問題は、その後の町づくりによって解決していくしかなかった。

難産のはてに生まれた新五城目町が歩き出したころは、ちょうどわが国が高度成長の波にのって、産業経済の急激な発展期に入ろうとしていた。町も新町の発足によって新しい発展の青写真を描いた。合併後の町の様子を統計によってみてみよう。

まず新五城目町が正式に発足するまでの手続きをふり返っておこう。

三〇・二・一二 五城目町・馬場目村・富津内村・内川村・大川村をそれぞれ廃し、五カ町村を合併して「五城目町」を設置することについて、知事に申請する廃置分合の議決終る。

三〇・三・二二 昭和三〇年三月から五カ町村を廃し、五城目町とすることの秋田県告示第一四四号が出る。（知事池田徳治）

三〇・三・二九 五カ町村廃置分合により五城目町をおき、昭和三〇年三月三十一日からその効力を生ずる旨の総理府告示第五三一号が出る。（内閣総理大臣鳩山一郎）

三〇・三・三一 新五城目町が発足。

三〇・四・一一 初議会が招集され、初代議長に畠山松太郎を選任。

三〇・五・一 初代町長に菊地米蔵が就任。総額二億九、八〇〇万円の新町建設五カ年計画を策定。

三〇・六・二四 旧町村と新町の会計事務引継ぎが完了。

三〇・七・二五 昭和三〇年度当初予算（一般会計）一億二、三〇九万円が決まる。（注Ⅱははじめの数字は年月日をあらわす）

合併から一年間は、旧町村議会議員の身分はそのままつづくので、議会を開催するのは人数が多いだけに議場を確保することが大問題で、開会のたびに、五城目小学校の体育館がつかわれた。新町の実質的な議会が組織されたのは、三二年三月二日に執行された町議会議員選挙による。四月四日には町議会が開かれ、議長に加賀谷力司が決まったが、四月三〇日の町長選挙で加賀谷力司は町長に当選している。

菊池米蔵 三〇・五・一〜三二・六・五

加賀谷力司 三二・六・一九〜三六・二・一〇

北島金森 三六・二・二五〜四〇・二・二四

小森源四郎 四〇・二・二五〜四四・二・二四

夢の多い新町建設計画も、自主財源の乏しい地方自治体では限界があった。国・県の補助金や交付金は、合併促進のころの話とは異なり大変しづいものになった。町村合併によってなにもかも実現するものではなく、計画をたててじつくりと進めるしかなかった。ところが、北秋田郡・山本郡・秋田市に境を接するほどに広大な面積となった町域、そして、山間部をかかえこんだ町は、平地部だけの自治体とちがって、開発の手を待っているものが多かった。急を要するものも多かった。困難な歩みを、それでも町は着実に目標に向かって進めた。

経営耕地面積（昭和40年2月）

	総 数	田	畑	樹 園 地
	193,353 畝	170,524 畝	21,884 畝	945 畝
五 城 目	32,936	28,848	3,303	785
馬 場 目	37,236	31,632	5,604	
富 津 内	38,807	33,651	5,136	20
内 川	24,959	21,988	2,891	80
大 川	41,286	39,605	1,681	
面 潟	18,129	14,800	3,269	60

経営耕地の規模別農家数

（単位：戸）

	総数	～29 畝	～49 畝	～69 畝	～99 畝	～149 畝	～199 畝	～249 畝	～299 畝	～300 畝以上	%
総 計	1,906	204	309	284	314	361	232	123	49	30	
五 城 目	303	30	44	40	42	59	49	24	11	4	15.9%
馬 場 目	443	51	88	85	71	96	41	9	1	1	23.2
富 津 内	384	49	53	40	78	69	56	29	9	1	20.1
内 川	317	36	66	66	60	57	22	7	3		16.6
大 川	302	21	41	33	37	49	40	42	19	20	15.8
面 潟	157	17	17	20	26	31	24	12	6	4	8.2

農用機械所有台数（昭和37年12月～40年2月）

種 別	個 人 有	共 有	計
動力耕耘機	624 台	74 台	698 台
トラクタ	5		5
発動機	271	5	276
電力脱穀機	1,077	1	1,078
動力糶摺機	1,301	4	1,305
動力噴霧機	710	23	733
動力散粉機	6	2	8
動力タタ	46	31	77
動力揚水機	178	14	192
動力イ	57	13	70
サ	99		99

産業の発展
町の中心産業は農業ともいえるが、二九年の冷害後一〇年間で保温折衷苗代から三早栽培・機械化・完全防除などの普及で、米の収穫高は増加の一途をたどった。同時に農村への消費経済の滲透や農業改善投資の増大によって現金収入を重視する傾向をもたらした。そして、農村の都市化や農村の解体が叫ばれるようになり、ほとんどの農家は兼業農家となり、農家の主婦まで町の工場に通うようになった。また、出稼ぎは常習化し社会問題となった。

四〇（一九五〇）年の農業を次の三ページにわたる統計によって概観してみよう。

ところが、この後の一〇年の高度成長は農業構造をさらに苛酷に変化させた。そして、とどのつまりは減反が実施された。農民は農業の前途にいい知れない不安を感じた。減反とよばれた米の生産調整が行なわれたのは、四五年度産米からであるが、この年の二月からその作付面積を削減調整する作業（減反）がすすめられている。四五年は町の農業にとって重大な曲り角になった年といえる。

米作りの見直しによって、農業経営の近代化や多角化がはかられている。四二年三月三一日に館越に農業近代化パイロット事業のビニールハウス団地が完成したのも、多数飼育養鶏の事業をすすめるグループなどが生まれたのも、そのあらわれといえる。

製材・木工の分野でも、経営の合理化と設備の近代化がすすめられオートメーション工場が新設された。単なる製材から新しい合板・張板の製造や外材の加工などが行なわれるようになってきた。また、資源の高度な利用がはかられて、チップの生産が非常に多くなった。木工所の機械化も進められてきたが、デザイン研究や新製品の開発や協業化の面で、まだ努力の必要があるといわれている。立ちおくれを指摘されるものに打刃物工場の問題もあり、四〇年代に入ってからきびしい転換を迫られているものに、打刃物・家具・指物などの業種の外に結桶などもある。

伝統をふまえた酒造工場は、設備の近代化がおり、オートメーションで工場が動いている。しかし、その販路の拡

業種別商店数等の調査（昭和39年商業統計調査）

産 業 分 類 別	商 店 数	従 業 者 数	年間販売額	商品手持額
総 計	290	694 人	1,088,457 円	174,779 円
一 般 卸 売 業	10	44	210,579	28,581
織 物、衣服等小売業	32	135	271,583	70,432
飲 食 料 品 小 売 業	153	248	321,569	19,967
自転車、荷車、小売業	11	16	17,822	4,688
家具、建具、什器小売業	23	61	70,295	20,377
そ の 他 の 小 売 業	34	99	165,333	30,734
飲 食 店	27	91	31,276	

所有別・樹種別林野面積および蓄積

	面 積	蓄 積		
		針 葉 樹	広 葉 樹	計
総 計	16,345 ha	742,216 m ³	651,253 m ³	1,393,469 m ³
国 有 林	8,664	339,150	566,610	905,760
県 有 林	305	19,554	—	19,554
町 有 林	420	10,277	1,314	11,591
部 落 有 林	623	33,335	2,247	35,582
私 有 林	6,333	339,900	81,082	420,982

（注）以上『五城目町の歴史』より。

大がこれからの問題とされていて、状況はきびしいものがある。

町の商店数は、高度成長の時代となつて増加し、年間売上げも順調にのびてきているが、そのかげには業者の努力や研究もあるが、商工会や商店連盟をいちはやく結成して、商店の診断や指導、税金対策、売出しのための有効な組織活動をしていたことも忘れてならない点であろう。古い歴史のある「市」は、道路交通取締法によつていく度もその存続が問題になった。市は五城目の商業経済活動の柱であることから、これからも市を守っていかなければならないという内外からの声が強い。

町の面積の七六％は林業地域で、その中の五三％が国有林である。戦中戦後の濫伐を回復するために、森林組合などで毎年一五〇万本の植林を行っている。この事業で特筆されるのは、長期的計画に立った県

土地の種別（昭和37年現在）

田	172.3 ha
畑	278.6
宅 地	146.1
山 林	1,216.3
原 野	676.2
雑 種 地	0.7

農家数と農家人口（昭和40年）

	農 家 数	専 業	兼 業			農家人口
			第 1 種	第 2 種	計	
	1,906	174	797	933	1,732	10,932
五 城 目	303	71	96	136	232	1,697
馬 場 目	443	18	170	255	425	2,607
富 津 内	384	28	163	193	356	2,259
内 川	317	3	111	203	314	1,757
大 川	302	42	172	88	260	1,723
面 湯	157	12	85	60	145	889

季節出かせぎ者（昭和39年）

	北海道	東 北	関 東	関 西	その他	県 内	計
男	178		240	180			598
女	2	20	2	2	96	48	170
計	180	20	242	182	96	48	768

業種別事業所等の調査（昭和38年工業統計調査）

産 業 分 類 別	事業所数	従業員数	製造品出荷額	1 事業所当り従業員数	従業員 1 人当り出荷額
総 計	100	1,292 人	201,217万円	13 人	156万円
食 料 品 製 造 業	21	167	54,850	8	328
木材木製品製造業	40	902	134,165	23	149
家具装備品製造業	23	175	10,447	8	60
金属製品製造業	9	16	394	2	25
そ の 他 製 造 業	7	32	1,361	5	43

行造林で、例を高千地区にとつて述べてみよう。

高千地区には、六（一九三一）年三月二三日ときの知事稗方弘毅と村長小玉孫三の間で契約した「二の沢県行造林」六五町八反二五歩と、九（一九三四）年六月一日ときの知事式部六蔵と小玉村長の間で契約した「入通沢・岩見沢県行造林」入通沢四〇町二反余、岩見沢二一町九反余とがある。二の沢は契約期間が昭和六九年まで、入通沢・岩見沢は七三年までとなっており、分収歩合はどちらも県五割、富津内村五割であつたが、関係集落である高千地区には、林収益の三割が交付される約束であつた。

分収率は、契約当時の「公有財産義務負担に関する規程」によつて定められたもので、植栽から下刈などの撫育事業の費用はすべて県負担となるが、間伐などの実収入のある分については分収割合によつて分収金が交付されることになつていた。小玉村長は、合計一二八町の県行造林がスタートしたとき、やがて伐期近くなればこの収益だけで村を維持していけると考え、明るい希望をもつたという。

四五・六六年で二の沢林道を開設したとき支障木伐採によつて、町へ交付されたのは一五〇万円余で、そのうち高千地区へ四五万円程が交付されているし、四三・四・五年の入通沢林道開設のときも同様三三六万円が町へ交付され、うち百万円程が高千地区へ交付となっている。このように、町財政・地区の財政への貢献は、永続的で大きいものがある。現在の推定材積は全部で二七〇〇立方メートル（九万七千石）程となっている。

教育の充実

地域の人びとの学校教育への関心と期待は、高度成長経済の時代になつていつそうのたかまりをみせるようになった。また、公民館を中心とした社会教育（その後、生涯学習というようになる）の分野もますます重要視されるようになってきている。教育投資は、それによつて増大していたが、この点も町村合併によつて解決されるべき問題であつた。

行政の広域化によつて学校統合が可能になり、適正規模の学校が配置できるようになり、その第一着手として五城目中学校と富津内中学校の統合が早くも三〇年八月二六日に決まつている。一二月には、統合中学校舎の敷地が広ヶ野に決定したが、場所をめぐる根強い反対があつた。三一年一二月に建設工事施行が議決され、翌年四月には一期工事に着工した。統合した五城目第一中学校が新校舎に移つたのは、三四（一九五九）年四月一日のことであつた。通学路が田町からのび広ヶ野橋ができて広ヶ野（希望ヶ丘）は景観がすっかり変わり、公営住宅も完成して丘の上は住宅地に変貌していく。

統合中竣工祝賀式は五月に行なわれたが、その前の四月一八日に昭辰町の旧五城目中校舎に役場が移つた。規模が大きくなつた役場やその他の機構がこれによつて広い庁舎におさまることができた。

このころは、各小中学校の増築・新築に追いまわされた。これは旧町村以来の宿題であつた。杉沢小独立校舎開校（三一・五・一八）、大川小二教室増築（三三・三・三二）、杉沢中独立校舎竣工（三三・一二・二〇）、富津内中学校舎竣工（三四・一二・二〇）、五城目幼稚園竣工（三五・一・一五）と列挙すると、毎年その解答を出していったことになる。

しかし、もっとも大きな問題は、五城目小学校校舎の新築であつた。校舎の腐朽から新築が論議されていた五城目小は、創立九十周年記念式典の前後からその具体的動きが出てきている。三九年六月一日五城目小学校建設準備委員会の発足がそれである。だが、大規模校を簡単に建設するわけにはいかなかった。いつの間にか財源確保から学校統合による建設に、その内容が変わつていった。統合小にするとその場所が問題になるし、隣接校が統合の対象となることも問題であつた。

やがて、五城目小と馬川小の統合が発表になり、新校舎建設の場所が羽黒前の瀬戸座跡付近と発表されると、俄然統合反対の声があがつた。明治以来の便利な新畑町校舎の場所という、羽黒前移転反対の声もないわけではなかったが、それよりも強い反対の声があがつたのは馬川地区からであつた。馬川小のPTA「みのる会」を中心に地区民全体が、

直接的な反対行動にまでエスカレートしていく。四一（一九六六）年二月一日に町議会が統合決議をした翌日に馬川地区住民大会を開き、あくまでも反対するという声明を出したのは、四月一日統合の新五城目小学校が発足、建設場所の整地がはじまったという危機感からであった。反対住民は、ブルドーザーの前に坐りこんで阻止行動に出た。そのため統合は八月になって解消され、改めて四二（一九六七）年四月一日五城目小と富津内西小が統合した。四三（一九六八）年四月一日管理棟と普通教室だけができた羽黒前の校舎に両旧校舎が移った。この後、富津内西小学校舎は六月二日から誘致企業の「末広繊維」の工場として操業を開始し、五城目小跡地は売却されて校舎は解体された。校舎竣工式は、四三年二月二三日であった。

この後、馬川小は四五（一九七〇）年二月二十八日未明の火災によって焼失し、その後の四月一日で五城目小に統合した。三六年一二月、町で最初の完全な学校給食を実施した馬川小を焼いた火は、給食調理室のかまどの煙道から出たものであった。

五城目一中・五城目小と、中心校は近代的な鉄筋コンクリートの校舎となり、よい環境が用意されたが、周囲の小規模校もその施設設備は着々と整備されてきている。

三四年八月二十九日、警察署の移転したあとの建物を利用して開館した中央公民館は、社会教育のセンターとして地区公民館（分館）をその手足として活発に活動してきている。四三年八月二四日・二五日、社会体育モデルの公開研究会、四九年度指定の生涯教育パイロット町も、その成果が認められてのものである。老朽のひどい公民館から、新しい社会教育のセンターに移るようになっていく。

消防力充実強化

新五城目町になってめざましく整備されたものに消防力がある。五城目消防団は、四九年度で創設百周年となり六月二一日にその記念の総合防災訓練を行ない祝っている。

消防のはじまりについては、すでに述べてあるが、ガソリンポンプ購入の大正二四（一九二五）年五月までさかのぼる。購入したガソリンポンプはドイツ型高圧タービン式の、最新式のポンプであった。組員は八〇人に増強されている。大正一〇年の大火を防ぐことのできなかった消防力に対する反省からであった。

五年九月には湖東部初の消防自動車を購入しているが、フォードA型一九二九年式四〇馬力の最新型であった。このときから運転者を採用して常時勤務を実施したが、自動車ポンプ購入資金は有志の寄付であった。このあとのことについては、「広報五城目」の「五城目町の一〇〇年」シリーズから紹介しておく。

昭和十四年四月警防団令によって警防団という郷土防衛組織となっていたが、二十二年六月消防団令によって消防団という本来の名称になった。その以前敗戦後わずか四ヵ月後、常備消防部が部員十名の配置で発足した。（略）場所は役場前の自動車ポンプ置場、現在の郵便局のところであった。

二十二年六月、町民の寄付によってV8型消防ポンプ自動車を増強した。（略）当時は、だれもが食べることに追われ、インフレは天井知らずであった。消防力を強化するなど本当は一笑に付される性質のものであったが、わが町ではそうではなかった。（略）長い間親しまれてきた下町の消防小屋の老朽はひどくなっていた。そこで、庁舎を川原町十字路のところに新築したのである。（略）この庁舎は、二十四年九月に消防組織法が公布され、消防本部設置条例が定められて、そのまま消防署となったが、署の設置も郡内第一号であった。署員はそれまでの部より強化され十八名となった。初代署長は町議をつめたこともある消防生えぬきの石川兼吉であった。消防本部消防長は町長渡辺道蔵である。（略）

この後は、消防団の機械力充実に努力し、二十五年五月に四十五万円で手引ガソリンポンプを買入れ、第一分団に配置。二十七年十二月には小型動力ポンプを購入して第三分団に配置。第二分団の手引ガソリンポンプも四十四万円で更新している。このころから、小型動力ポンプいわゆる可搬式ポンプに着目して配置する計画が立てられるよう



旧消防署（昭和 36 年、川原町）
左端が最初の自動車ポンプ。

になった。（略）さらに二十八年十二月には市原ポンプいすゞ自動車を二三〇万円で購入、消防署に配置した。自動車ポンプは三台となり、町消防力は団の機械化とあいまって飛躍的に増大した。署の人員も二十二人となった。（略）

この間、大川村では自動三輪ポンプを本村に配置（二十八年八月）、富津内村では小型動力ポンプを上山内、台、落合、高千に配置（二十九年十月）して、それぞれ消防力の整備強化に努力していた。（略）合併間もない四月中村に小型動力配置。手引ガソリンポンプを九月と十月に、それぞれ湯ノ又と浅見内に配置している。

（略）消防署の機動力の方は、古くなった自動車ポンプを新しいものに換えることで強化した。（略）、ニッサン・ジープ式に更新したのである。一八四万円の最新強力のパンプ車が、三十一年三月に署に配置された。（略）

三十二年一月に五つの団を統合して五城目町消防団ができ、それまでの団が地区隊となり、五地区隊の下に一三の分団の編成となった。団員三三六名、三輪ポンプ一、手引ポンプ二、可搬ポンプ一二である。（略）

この間、署ではフォードA型車を新しい車にかえた。（略）新車はトヨタ64年式A2級ポンプ車で、二三三万円であった。

また団の方は、三十一年から四十年までの間に、手引動力ポンプ三、小型動力ポンプ十五を購入、主要全集落に動力ポンプが配置した。四十二年十二月消防無線が署に設けられ、四十三年暮れには新庁舎が山手線十字路に完成した。

た。

（「消防力の充実」「広報五城目」昭和49・8・15）

以上の外に、四七年八月一日救急車、四九年六月八日広報車と水槽付ポンプ自動車それぞれ署に配置し、さらに装備が強化されている。

五城目警察署は戦後警察機構の改革がはかられ、自治体署と公安委員会が設置されることになった。本県は二市三三町に三六署がおかれ、二二年二月二六日付で五城目町には五城目町警察署がおかれ保坂梯之助が署長となった。これまでの警察は国家地方警察となり、自治体署のない五城目町以外の地域をカバーするために、秋田市土崎に南秋地区警察署がおかれ、五城目には警部補派出所がおかれた。それまでの署は玄関を境に半分ずつ自治体・国警が使うことになった。

二六年一〇月一日からは自治体警察署が廃止になり、国家地方警察五城目地区署となり、さらに二九年七月一日制度改革によって五城目警察署となった。この後、細越に移転したことは前述したとおりである。

開発と交通

明治以来、幾度か計画された八郎潟干拓事業は、「世紀の大工事」というよび声のもとで三二（一九五七）年にはじまった。わが国第二の大湖八郎潟の大部分を干拓するというのである。総工費一九五億円が最初の予算であった。

干拓は、中央干拓と地先干拓に分けられ、大川の地先干拓は東部第五工区（飯田川町・井川村・五城目町）として三三年に着工、馬場日川下流大川地内の堤防のかさあげ工事とショートカット工事も付随して施工される。

中央干拓地の干陸式と新村誕生式典は、ときの農林大臣赤城宗徳を迎えて三九年九月一日に行われた。地先干拓工事は、四〇年に干拓堤防の建設がおわり、次の年には干陸と内部工事や整地が施工された。新しい陸地となった湖岸部の三三ヘクトールは、その秋に大川地区の農民に配分されることに決定した。四二年秋には、最初の収穫として反当七

俵をあげ、よいスタートをきっている。

(略) 河口には三角州をつくり、この川の運んだヘドロが湖底にたまった所が、八郎潟中央干拓の堤防造りで最も難工事となった場所であった。(略) 同時に流入河川の改修も行われ、(略) 竜馬橋もかけかえられた。(略) 美田と八郎湖をへだてる干拓堤防は馬場目川口から延々と南につづき新しい景観となっている。陸の広さと水の広さ、その向うに男鹿三山、近くに森山と低平な風景の平凡さではない変化と雄大が、堤防に立つ人の心をとらえるにちがいない。

『五城目町の名所と旧蹟』五城目町教育委員会

これが、干拓をおわった後の地先干拓地のようすである。四一年一月一日八郎潟入植訓練所入所式が行なわれ、第一次入植者が大潟村の大地に挑むことになる。これに先立つ四〇年一月一日秋田湾新産都市が本指定となり、いっそう高度成長は加速され郷土地域の変貌はいちじるしいものがあつた。

一七億七千万円の工費で着工した萩形ダムは、四一年一〇月に完成した。このダムの水を四・五キロメートルの導水トンネルを通して発電する杉沢発電所は、この年に完成し十二月一日に送電を開始した。最大出力一万五千キロワットの発電量は、当時の県営発電所の中では最大である。この電力は、秋田湾臨海工業地帯で増大していく需要量に大きなプラスとなるものであつた。しかし、上小阿仁川の冷水を、馬場目川におとすために、農業用水としての問題が指摘されたり、鮎などの生態に変化を及ぼすというエコロジーの上での問題が指摘されたりしている。

四二年六月九日、森山頂上に工事していた電々公社のマイクロウエーブ中継所が完成した。パラポラアンテナが山頂の塔で銀色にひかっているのが、湖東平野のどこからもみえ、工事のためにつくられた自動車道路はそのまま維持管理用の道路としてのこされ、観光に利用されるようになった。森山山頂は、このため湖東部最高の展望台となった。これへの町民のうけとり方には複雑なものがあつた。森山は三〇年代半ばごろから、大仕掛けな石材採取がはじまっていた。岡本側の森山の斜面や細越山ほ大きくきずつつけられ、そのきずは年々大きくなっていた。



44年に廃止された五城目軌道

特に森山の場合は、天然記念物に指定された「スズ虫の群棲地」だけに、公害や自然保護が問題となった四〇年代後半になると、森山の自然を守ろうという声があがってきた。採石を止めようという運動が青年たちの間におきたのは四八年からである。四九年から森山の総合開発が着工され、自然保護に新しい問題が提起されている。

三〇年代の末から四〇年代のはじめにかけて、この地方もモータリゼーションの時代に入った。それを追いかけるように、道路も改修され新設されていった。この時代の流れを象徴する出来事は、中央交通の電車廃止と杉沢森林軌道の廃止であらう。

五城目・八郎潟間の電車は、自家用車ブームの中で通勤時間帯以外は閑散となり、年々赤字がかさむようになってきた。会社は、合理化を迫られていた。合理化には、鉄道を撤去し電車の運行をやめるしかなかった。町民からは軌道を惜しむ声があがったが、四四年七月一〇日電車は廃止され、一日からは国鉄連絡のバス八郎潟線が運行された。廃止される日には、町民ホール(旧五城目小体育館)で「軌道をしのぶ会」を町民有志が開いている。会社では記念切符を発行し、この日はお祭りのようなにぎやかさであつた。電気機関車と客車それぞれ一台は、五城目小のグラウンドに運ばれ保存された。しかし現在は撤去されている。

このバス連絡で便利になったかどうかには断じ難いところであるが、この年の二月二三日には五城目電報電話局が完成し、電話がダイヤル式に切替えられたのは確かに便利になったといえよう。その後の電話の普及はめざましいものがあり、現在は携帯電話の時代、ファックスの時代になった。四六年九月七日には、最後までこのこつていた森林軌道

といわれた五城目営林署杉沢森林軌道銀ノ沢―杉沢線の廃止式が行なわれた。

馬場目国有林に森林軌道が登場したのは昭和六年。はじめは手押しのトロロッコだった。(略)五城目営林署管内にガソリンカーが配属されたのは昭和十七年、馬場目岳一帯の天然秋田杉の開発に国有林を縫って活躍した。ガソリン車、ディーゼル車の編成は十二両で、十一両が木材運搬用、最後尾の一両が客車となっている。定員は十七人ほどの小さいものだが、作業員だけでなく、蛇喰、北ノ又といった辺地の人たちも無料で座席を提供した。

町の中心部から十キロ―二十キロも離れている人たちにとって、当時はたゞひとつの交通機関、日用品の買い出し、通勤通学、病人の運搬―。地元の人たちの足として欠かせない存在だった。冬を除いて一日二往復だったが、いつも満員という人気ぶりを見せた。(略)平均時速わずか九キロのスピードは、現在のトラック輸送にはとても追いつかない。列車や線路の維持費もバカにならない。かつては網の目のように張りめぐらされた森鉄も年を追って縮小され、最後に残されたのは杉沢―銀ノ沢線だけとなった。(略)

〔秋田魁新報〕昭和46・9・8

長野県本曾谷とともに全国で二つだけ残っていた南秋田郡五城目町の杉沢森林鉄道(杉沢―銀ノ沢間一km)が七日の廃止式で三〇年の歴史を閉じた。小回りのきくトラック輸送に最近では邪魔者扱いされてきた同鉄道だが、廃止式には秋田営林局、五城目営林署関係者のほか、沿道住民約百人が線路わきに顔を連ね、別れを惜んだ。(略)

〔朝日新聞〕秋田版・昭和46・9・8

「老兵消える 愛され続けて30年」「ご苦労さん森林鉄道」と題した新聞記事の一部である。これによって運材はすべてトラックとなり、森林鉄道の路線はトラック道路となった。五城目・八郎潟間の電車の線路跡地は、四五年一月六日県内初の「自転車歩行者専用道」として開通している。森林鉄道の列車も、電車のように杉沢小と五城目一中と養老院の庭に保存されていたが、いまはなくなった。

道路の時代

まず五城目を通る二本の国道の、極く簡単な歴史を述べておきたい。

国道七号線Ⅱ明治七(一八七四)年、羽州街道は二等道路に格付けされる。明治一八(一八八五)年、秋田・青森間が四一号国道となる。大正八(一九一九)年、山形・秋田・青森間を国道五号線とする。この道路は、昭和二七(一九五二)年一二月、一級国道七号線になった。昭和三〇年代のバブル期に、秋田・能代間大改修し、同三〇年代後半、井川バイパス工事が行われ、つづいて大川・一日市バイパス工事がつづき昭和三八年に工事がおわった。

国道二八五号線Ⅱ明治三〇(一八九七)年、郡道として工事をし大正二(一九一三)年、県費支弁道路とされた。大正八(一九一九)年、道路法により県道五城目・大久保線とされ、昭和二九(一九五四)年一月、国道につづ「主要道路」にランクされる。同年一二月、県道秋田・大館線となり、昭和四五(一九七〇)年、国道二八五号線になり、改良舗装工事急ピッチで行われる。町内分は昭和四六・四七年で完成した。

国道二八五号線

地方にも自動車の時代がおしよせてきた。それは、「道路の時代」でもあった。五城目での道路の時代はじまりは、昭和四一年の国道七号線のバイパス化・直線化工事である。

バイパスは井川方面から直接的に北上、下樋口集落の東側を通り馬場目川に新龍馬橋を架けて、八郎潟町一日市・夜叉袋・真坂の東を北上するという、集落外を走る新しい国道線であった。

しかし、国道七号線は本町の西端地域を走る道路であったから、昭和時代は町域の再開発に対する影響は大きいとは、にわかにいえないものがあつた。国道二八五号線の場合は、国道七号線分岐(合流)して町の中心部を通る国道である

ので、町づくりに大きな影響があった。

そうした事実を年表風にあげてみよう。

昭和三五年 山の手線（細越から畑町まで）

” 三六年 五城目・上小阿仁間に定期バス走る。（橋を永久橋に。道路の直線化）

” 三七年七月一日 山の手線開通式

” 四一年 国道七号線バイパス化。

” 四四年七月一日 県道五城目・八郎潟間直線化、電車廃止。

” 四五年 県道が昇格国道二八五号線に。

” 五六年二月八日 二八五号線秋田峠トンネルなど開通、難所解消。

” 五七年一月二日 磯ノ目に町役場新庁舎落成

一月九日 ウッドロード（中央線）開通。

” 六〇年八月一日 国道二八五号線バイパス全面開通。「リバーサイド磯ノ目」開館。

この町史の中で、阿仁地方への鉄道新設や道路改修が町発展の鍵となっていて、いろいろな動きがあったことと、そうした運動が結実していないことを述べてある。それがわが国の高度成長経済の時代を迎え、自動車と道路の時代になって、かつての町発展の鍵が手中のものになったという具合に思える。

県道の「阿仁道路」が国道二八五号線に昇格したことによって、道路予算は飛躍的に多額なものになった。国道二八五号線は、県庁のある秋田市と、そこから最も遠い県北部を結ぶ最短ルートであった。

その時点で高速自動車道は、鹿角地方を少々かすめる程度に走っていて、八戸自動車道も鹿角地方が分岐していた。秋田市と十和田南インターをつなぐ最短ルートは二八五号線であったから、大きな投資が国の予算でされるのは当然で

あった。

国道昇格後、一〇年もしないうちに、南秋と北秋の郡境の難所秋田峠にトンネルが開通した。またトンネルの向う側のカーブも解消され、五城目から森吉町米内沢まで自動車で四〇分、隣の村上小阿仁村役場まで三〇分もかからない距離になった。二八五号線を車で五城目へ買い物に来る阿仁側の人々も多く見られるようになった。

現在、磯ノ目東・磯ノ目西に国道二八五号線を境に分けられている磯ノ目は、以前は馬場目川右岸の磯ノ目開発・新役場建設 あくどとよばれていた場所であった。昭和初年に治水工事が行われて、堤防を築くなどの治水工事が施行されるまでは、年間数回の洪水に見舞われていた。洪水のたびに軌道線が土手状の場所を走っ

ていたところまで濁水がやってきた。

洪水に見舞われた場所は、現在の五城館の西側辺りから上川崎（八郎潟町）の取水ポンプのあった所までの広大なもので、「あくど」は、水田と畠になっいて、現五城目高校対岸の岸近い所に高いポプラの並木があった。

その広い水田や畠のあくど地域を「磯ノ目」という新地名で都市化開発をはじめたのは、加賀谷力司が七代目町長になって一年目ほどの昭和五三年度末に策定した「第三次五城目町総合開発計画」に基づいての事業で、五四年度に着工している。

これを後押しするように、昭和五四年六月中央交通バスターミナルが五城目駅跡に開設され、五五年三月には秋田地方事務局五城目出張所が磯ノ目地域に接する場所に、一二月には五城目警察署が字七倉ではあるが同様の場所に新築している。近くに、五六年三月に五城目保健所も竣工した。

そして決定的なのは、昭和五七（一九八二）年一月二日の五城目町役場庁舎の新築落成である。次の日は祝日になっていたから、終日町民が見学に訪れた。そしてその素晴らしい近代建築の庁舎に目を奪われたのであった。それまでの

町役場は町中の狭い場所にあつて、昭和三〇年の合併後は庁舎の狭さに特に困っていた。

その時に五城目中学校が富津内中学校と統合、広々野に校舎を新築して、昭辰町にあった校舎から五城目第一中学校となつて、昭和三四（一九五九）年四月一日に移転した。この空いた校舎に、四月一八日町役場が移転するという芸当をした。これを決断し実行したのは、合併後の新五城目町の二代目町長になつた加賀谷力司であつた。

しかし、五城目小学校の古い体操場を移築したりの校舎そのものが粗末な建物であつたから、最初から役場庁舎新築は、その場所も含めて問題であつた。この宿題は解答がないままに、二〇年以上も経過していた。

旧五城目中学校校舎に役場を移したのは、二代目の町長加賀谷力司であつたが、その後、加賀谷は五代から九代まで（昭和四四年二月―六〇年二月）連続町長の座にあり、多くのアイデアを持っていた人であつた。

その間に国道二八五号線のバイパスが飯田川町・井川町境で国道七号線から分岐し、以前は町内商店街を通つていたのと違い、直線的に新間遺跡で有名な井川町新間山の西側の田園地帯を森山に向つて一直線に五城目町域に入る。馬場目川には橋が必要で、その場所はあくど・磯ノ目である。磯ノ目大橋が開通したのは、昭和五六年一月九日のことで、奇くも前日の二月八日に国道二八五号線の一番の難所秋田峠にトンネルが通つていたのである。

二八五号線バイパスが五城目町磯ノ目地区を通つた時には、本町部再開発の幹線となつていえる中央線（五城目保健所―馬場橋）八四六メートルが完成していたから、国道と本町部は、「朝市通り」に、また雀館運動公園



秋田峠トンネル



加賀谷力司

や広域体育館・屋内温水プール方面に、ストレートに大通がつながつたのであつた。

この中央線は、かつて五城目軌道線が走つていて、その後秋田中央交通バス路線になつていたが、拡幅して大通りにしたのである。

遅くはなつたが、加賀谷町長はひとつの解答として、昭和五七（一九八八）年一月二日、町役場新庁舎が竣工させたのである。所在地は西磯ノ目一丁目一番地一である。この新庁舎は建築中から人びとの話題になるほどの建造物であつた。国道二八五号線側には建物の東側が、

県道秋田・八郎潟線側には建物の北側が、交差点の中央線に正面玄関が向いている。全体が大きな翼をひろげたような形の四階建、地下一階の庁舎は、実物よりもはるかに大きく見えた。

次の日の一月三日の祝日は、新役場見学日として開放した。町で最高最大最新の建造物である役場を見るだけでなく、内部のどこにでも入れるというので、町民の大半がおしかけるという、にぎわいになつた。

用意した新庁舎紹介の、みどりのリーフレットが不足するほどであつた。

加賀谷町長は、誇らかに「日本一」の役場庁舎と表現したが、見学者は外観も庁舎内も、町長もいうように「日本一」と実感したのである。

きやどっこまつり

今では五城目町の夏まつりとして、町だけでなく湖東部に定着した「きやどっこまつり」がはじまつたのは、昭和六三（一九八八）年である。

「きやど」とか「きやどっこ」というのは、道路・道・街道を示す、当地方の方言である。このケースの「きやどっこ」

は、具体的には中央通りをいつている。

「中央通り」は五城目保健所前から馬城橋（昭辰町・新町の馬場目川）までの直線的な大通りで、名実ともに本町部の幹線の街路である。この道路の工事は、二八五号線からバスターミナルまでは旧軌道線がバス道路になっていたのが、拡幅工事を中心であったが、それより東は如来寺の移転、宗延寺の移動があり、えびや小路などの拡幅のために住宅・商店や製材工場を移転させるなどの大工事になった。

中央通りと新畑町・紀久栄町の旧道は、下町通（朝市通）と交わる少し手前でいっしょになるが、そのポケットパークには昭和五九（一九八三）年二月一日、この近くに生まれた作家矢田津世子の文学碑が建立され、加賀谷町長が除幕した。碑には「思い出の町五城目町」の一節が刻まれている。矢田は父が町の助役で明治四〇（一九〇七）年に生まれている。

本町部の幹線道路は、江戸時代のはじめの頃まで五十目上町村・五十目下町村とされていた一本道で、その後五十目村上町・下町の二つの字となっていた、市の立つ上町通と下町通になっていた二本の並行する道路だけで、南北方向だけで東西方向のしつかりした幹線道がなかったのである。

中央通りが、五城目の歴史の最初の東西方向の幹線道路といえる。そしてこの中央通りが、上町通り・下町通りに直結するから、その存在の意味は大きい。それが「きやどっこまつり」の本当の意義であり、よろこびなのである。

「きやどっこまつり」がはじまったのは、昭和六一年七月から架け替え工事をして新しい馬城橋の竣工によってである。橋の東側は、戦前の狭く折れたり曲ったりして「念仏車の坂」から、高崎方面に向う道であった。その後二度にわたって橋を渡って直線化され、拡幅されて、その後旧馬川小学校付近まで改良されている。

そうした道路の改良のメドがついたのは、昭和六三年四月三日新しい馬城橋が完成によってである。橋の中央には両側に休めるスペースがあり、そこから川の風景が眺められる。北の方向には前平山があり、山の上に五城目城（森林

資料館）が眺望できる景色は素晴らしい。橋を渡った昭辰町側の橋のたもとに小公園もつくられた。

第一回「きやどっこまつり」のキャッチフレーズは、「みちで遊び 橋でいこう」であった。

この年、六月一二日には、「全国朝市サミット・イン五城目」。一月一日からは第一一回「秋田県種苗交換会」が開催されるなど、にぎやかな一年であった。

記述を少し前にもどすが、昭和六〇（一九八五）年一月二〇日に「躍進五城目町合併三〇周年記念式典」を行い、「五城目町民憲章」・「町の花（ヤマユリ）・町の鳥（ウグイス）・町の木（スギ）」を制定、発表されている。

この年は「躍進」の文字が入るほどの事業や出来事が集中している。と同時に、「昭和の大合併」といわれた国策的な町村合併であっても、それがひとつの自治体として十全に機能し活力となっていくためには、たっぶり三〇年という時間をかけた努力が必要であるということ物語っている。

町村合併して新しい五城目町がスタートした昭和三〇年に生まれた子供が、三〇歳の壮年に育っているという時間が必要なのである。そして新五城目町も活力みなぎる壮年期に入ったのである。

三月には町長選挙が行われ、加賀谷力司が第九代町長に連続当選（連続五期、通算六期）している。

八月一〇日には、国道二八五号線五城目バイパスが全面開通して供用開始となった。それ待っていた磯ノ目大橋の北側のたもとは、リバーサイド磯ノ目が開館した。これは共同福祉施設として建設されたものであるが、一階は入口を入ると町の特産品を中心にした多彩な商品などの売店になっており、その奥の方は会議室・集会場になっている。

売店から二階に上ると、広いレストラン、その奥は五〇人ほどの宴会に使える広さの和室がある。一階からも二階からも、リバーサイドの名の通り眺望がよいと評判になった。

しかし駐車場が狭いといわれ、車の出入りに不便だといわれるようになった。

こうした町の努力に対して、職人の町といわれる五城目の「物づくりの伝統」をまもり、努力している人びとも動

きはじめたことに注目したい。職人は団体を組織し活動するのは苦手なものだが、時代は待ってくれないという認識を持つようになり、後継者問題も深刻化しはじめていたこともあって、職人の組織がつくられたり、町外にその優秀な技術や製品を示す機会を積極的にもつようになった。

活動のいとぐちとなったのは、昭和五九（一九八四）年六月二日に前平山頂上に天守閣の形で開館した五城目町森林資料館「五城目城」である。その三階のフロアは、五城目町の職人が作った家具・建具の展示場となっていた。この展示は町内の家具・建具職人の名人技そのものの展示ともいえる。

この後で職人の組織ができる。昭和六〇（一九八五）年四月一二日、異業種組合「秋田技能社」が八人の組合員で発足、初代理事長は板金業の村成人である。

次の月の五月二二日、五城目町物産協会が設立された。会員は二八人で家具・建具職人だけでなく、町のいろいろな職種の職人が加入している。初代会長は数代つづいた家具職人の渡辺琢智である。渡辺は職人町に生まれ育ち、町の木工業の優れた技術の保存と、製品の販路の確保だけでなく拡大を目指していて、職人たちの信望も大きかった。会長として適任であった。

昭和六一（一九八六）年五月二日に開催の「第一七回秋田県建具展」には、町内職人・業者が積極的に出品参加。その結果、町内の業者が上位を独占した。こうした形が、わが町の職人や製品の最高の宣伝となった。

この年の一月二四日、東京渋谷の東急デパートでの「秋田大物産展」に



森林資料館 五城目城

五城目朝市が参加し大好評で、商品が売り切れになってその補充に苦心したという。朝市組合を支えて町役場の担当課が大車輪の活動をしたという。

このような活動はその後もつづけられ、県内でも行っている。その一つを紹介すると、平成二（一九九〇）年一〇月一〇日から一五日まで、「五城目大物産展」を秋田市長崎屋で開催している。

支えるといえば、昭和六一年六月二一日に仕事を始めた五城目木材流通センターも忘れてはならないだろう。町内の工場や職人は、原木や木材を材料とする業種が大半であるから、流通センターの発足は大きな意義がある。しかし、その場所が町山入口の杉ヶ崎であることに、批判があった。

中央通のにぎわい

昭和四九（一九七四）年から二〇年余りの年月をかけた、磯ノ目地区土地区画整理事業が終わり、竣工式が行われたのは、平成七（一九九五）年三月二九日であった。リバーサイド磯ノ目の二八五号線の向いの緑地公園の中に、記念碑が建っている。

区画整理事業の範囲は、字鶴ノ木・上樋口字向川原・下川原・大川西野字田屋下のそれぞれの一部で、実に広大な土地である。その面積を考えると、二〇年の長い年も肯定できる。

前述したあぐどの全体が事業の範囲になっていくだけでなく、その南端の馬場目川には三本の橋がかかっている距離である。五城目橋（新丁の橋）、磯ノ目大橋（国道二八五号線の新設の橋）、西野橋（高校の橋）である。

事業区域内の道路などは、国道二八五号線・中央通のいずれも新設の二本の幹線に、新町役場、法務局出張所の役所、リバーサイド磯ノ目の複合施設、清酒醸造会社、寺院二寺があるという広大な土地である。昭和五二（一九七七）年三月三一日に如来寺が移転・改築している。

町内名でいうと、新畑町・古川町・紀久栄町・新丁があげられる範囲で、すべてが農地ではない。

この地域の東の部分（後に東磯ノ目になる）は、一部住宅地になっている所もあったが、西の部分（後、西磯ノ目になる）は、ほとんどが農地であった。しかし、旧軌道線に沿って上川崎から八郎潟町の町域が細長く、役場の近くまで延びていたりして入りくんだ場所であった。

町中央部につながる広い地域の開発整備であるから、二〇年という長い時間がかかったのも当然といえよう。この整備事業によって、多くの優良な住宅地が造成され、本町地域は生まれ変わったとこの後にいわれるようになった。

その様子は、中央通りを観察するとはつきりする。この通りの役場近くの入口には「ウッドロード」と標示したゲートがある。両側の歩道は、朝市通り（下町）に曲る場所まであって、そこにはケヤキの街路樹を植えてあるので、その時に呼び名にしたものかも知れないが、この名よりも「ケヤキ通り」の方が通っている。

ケヤキの街路樹は、二八五号線の一部の歩道のある所にも見られるが、やはり中央通りの広い街路の並木は素晴らしい。ここに立つて、東の馬城橋方面を望むと、遠く「馬場目の森山」ともよばれて「五城目の森山」との伝説がある葉師山がまっ直にある。四季それぞれのケヤキ並木のたたずまいとマッチした風景は、素晴らしいものがある。

しかし中央通りはそれだけではない。軌道が走り駅があった時から、バスターミナルがあり、軌道廃止後は、バスターミナルとして五城目始発・終着のバスが集中する場所であった。郊外型パチンコ店が盛んになる前は、駅前・ターミナル前パチンコ店が集客のポイントとなり、飲食店もあってにぎやかな一画になっていた。

広い直線道路が通ってからは、駐車場の複数のスーパーマーケットが開店、宴会場・飲食店や商店などが次々に開店し日夜人びとが集まるようになった。そういう動きの中で、町の施設がオープンする。

「五城館」開館

五城館は前述してあるが、五城目駅構内に接した農業倉庫であった。倉庫は昭和六（一九三一）年一月に駅構内南側に建築された、「農業倉庫一号」と、そのちょうど一年後に竣工した「農業倉庫

二号」と事務所で、さらに倉庫の南側に薬工品用の木造倉庫が建設されている。この一号・二号倉庫は米を収蔵する巨大な土蔵である。

昭和初期は「産業組合法」が施行されて、全国各地域にいろいろな業種の組合が生まれている。この法律や組合を研究・調査したのは、新町の近藤泰助と近藤の親戚の矢場崎に住む農民運動家の畠山松治郎であった。

そうした調査・研究の結果、地主であった近藤が呼びかけ、五城目だけでなく周辺の農村の人びとを説いて、「五城目販賣購買利用組合」を組織した。

五城目外四カ村から二五一名の組合員が集まった組合の最初の事業が「農業倉庫一号」の建設であった。まとめて購入し、まとめて販売するためには、どうしても倉庫が必要であった。一号倉庫の次に、すぐ二号倉庫建設にかかっている。ここで少々付け加えておくと、近藤は農業の組合を発足させた後、同じ手法で「医療組合」を組織。新町の自分の屋敷を提供。湖東部最初の総合病院を発足させたことを前述してある。その組合員のテリトリーは農業組合と重なる。

この巨大な倉庫は、五城目農協が建設したカントリーエレベーターによって不用になった。その不用になった倉庫が中央通りに面していることもあって、農協は五城目町に買ってもらいたいというのである。

時あたかも、竹下内閣のばらまきといわれた「ふるさと創成資金」が、全国の各自治体へ支給するという時代であった。農業倉庫二棟は町のものになった。

この時期は、昭和三二年から三六六年まで二代目町長をつとめた後、昭和四四（一九六九）年から平成元年初めまでの、五代目から九代目まで連続町長をつとめた加賀谷力司から、平成元（一九八九）年二月に一〇代目町長佐藤邦夫に交替したが、中央通りの整備計画も行事も大筋では変わることはなかった。

しかし、これまでの計画は細部や手法の見直しが必要であった。八月二三日「まちおこし町民一〇〇人会議」を開催。半年ほどの間に数回の分科会も行つて、平成二年「まちおこし百人会議」は町長に建議書を提出した。

また、五月中旬から「町政座談会」をはじめ、計画的に町内会を町長がまわって、町民の声を直に聞くようにした。

佐藤町長のもとで新しい発想の町政が具体的に動きだした平成二（一九九〇）年は、新五城目町になって三五周年に当たって、十一月三日「躍進五城目町三十五周年記念式典」を挙行、いっそうの発展を誓いあつたが、この年一年は注目すべき五城目らしい行事・催しものがつづいた。



抜穂の儀

寒坊猿田和男たち若い人びとや同好者たちから声があげられていた、「秋田追分」（五城目付近の「在郷追分」と「江差追分」をアレンジして編曲し、作詞もした）の鳥井森鈴の頭彰と秋田追分の普及を目的に、七月一日「第一回森鈴旗争奪秋田追分全国大会」が開催され、出場者もさることながら多くの聴衆が集まったのに驚かされた。この大会はその後毎年開催されている。

行事とか催しというべきではない、九月二八日ただ一度だけ、この場所だけの実に重要な儀式が行われている。大

悠紀の里 五城目

平成二年九月二十八日、大川石崎の水田で「抜穂の儀」が約一時間にわたって行われました。

天皇陛下の即位行事の大嘗祭に供えられる新穀を収穫する悠紀斎田に、この地が選ばれました。

実りのときを迎え、前日の「抜穂前一日大祓」の儀式を経て、「抜穂の儀」が行われました。

天皇陛下のお使いである古式にのっとった装束の抜穂使による神事ののうち、大田主と奉耕者九人が稲を四束刈り取り、抜穂使がこれを点検、神前の稲実殿にも納め、古式ゆかしい儀式は無事に終了しました。

昭和三年以来、六十二年ぶりに行われる大嘗祭に向け、悠紀田（京都以東の地に選ばれる斎田）に選ばれたことは、町にとっても大きな名誉となりました。（主基田（京都以西の地に選ばれる斎田）は大分県玖珠町）

きびしい警備のなか、厳かな儀式を経て、十月一日、収穫された玄米と精米は空路宮内庁へと送られました。

（平成二年二月一日付 町広報）

川石崎の「悠紀斎田」で大田主伊藤容一郎によって『抜穂の儀』が行われていることを特筆しておかなければならない。

六月一六日・一七日、菅江真澄研究会が真澄と関係深い本町を会場にして開催、九月一〇日から一〇月五日までの中山遺跡の発掘調査では、多くの重要な遺構や遺物が発見されたが、中でもわが国最古の「湾弓」が出土して大きな話題になった。民俗学・考古学関係の二つの出来事は、特筆すべきであろう。

加賀谷町長は多くの開発事業を実施し、特に磯ノ目開発事業は特筆されるべき事業として前述したが、不思議なことに企業誘致だけは積極的ではなかった。当町に進出が決定であった一部上場企業の「ミツミ電機」の例が示している。ミツミは五城目をあきらめ飯田川町に進出した。工業団地の造成も場所がよくない上に、狭かったから、進出する会社はなかった。

しかし新しい町長にかわったとたんに、元年八月に秋田部品・五城目工場、九月にエドウィン秋田ホーセ大川工場、二年六月には大久工業五城目工場が操業しているのである。

町の所有になった土蔵造りの農業倉庫二棟は、中央通りの中央に位置し、バスターミナルの真向いの好位置にあるため、町内だけでなく湖東部の人びとも集まりやすく、利用しやすいという、大きな利点があったから、高い買い物ではないという声もあった。町は「総合交流センター」として、多目的利用ができる構想で、町民各層から意見を聴く委員会をもち、さらに町民の考えをもとにコンサルタントに設計図を引かせ、さらに請負った建設会社の意見を入れた設計で着工することになった。

ところが、着工する時の設計は、町民代表からの希望や意見は、ほとんど忘れられていた。大きな広い入口、外から売り場全体が見える物販スペース、外から直接入れるカフェテリア、中央通り側が物販スペース、集会場は奥の棟などの希望意見は生かされていなかった。入口の狭さと傾斜は、今も来客を拒んでいるように感じられるのは気になる。

ギャラリーは意見が生かされたが、湖東部唯一のギャラリーとして利用されている。総合交流センター「五城館」・「矢



矢田津世子

田津世子文学記念室」が開館したのは平成七（一九九五）年四月二日である。以来、中央通りの一大拠点となっている。

文学記念室について、ここで説明しておきたい。

ちょうど五城館の開館が迫っている頃、町出身の作家矢田津世子のご遺族から、遺品の全部を寄贈したいという申し入れがあつて、これをお受けすることになった。

五城館には展示室が設けられていたので、これを「矢田津世子文学記念室」として、展示公開することになった。記念室は『日本の文学館 百五十選』（淡交社刊）『文学館のある旅103』（集英社新書）などにとりあげられ、マスコミで紹介されることも多く、文壇では「五城目町」はこの記念室で有名になった。作家・評論家の来訪も多い。矢田文学資料が町に寄贈されたのは、文学碑建立・矢田文学展（五城目城）や講演会を開催するなど、顕彰事業をつづけたことが評価されたからである。特に協力いただいた作家近藤富枝、文芸評論家・早稲田大学名誉教授紅野敏郎のお二方のお名前をあげておきたい。町教育委員会は、町外・県外の記念室に対する称賛に対して、矢田津世子作品集を平成一三年から一五年まで、主要な作品を三巻にまとめて出版し好評を得たので、次の年には一冊に随想をまとめて出版することになっている。

高速自動車道 と町の状況

秋田も高速自動車道の時代に入りつつあった。平成三（一九九一）年七月二五日、秋田自動車道の横手・秋田間が開通した。東北自動車道の北上ジャンクションで秋田方面に向う秋田自動車道は、県境のトネルなどの工事もスムーズに行われ横手ICを開業し、たちまち秋田南ICに至ったのである。秋田・東京間の秋田新幹線の開通の平成九年よりも六年早かったのである。

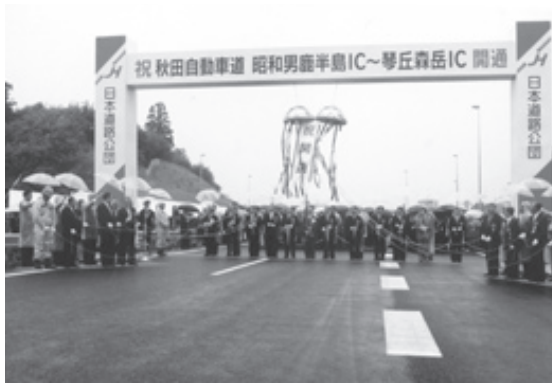
秋田自動車道とされている高速道は、正確に言えば秋田南ICまでで、その近くにあるジャンクションからは日本海沿岸東北自動車道（日治道）となっていて、現在は由利郡岩城町まで供用されている。北にのびる日治道は秋田ICから秋田北・昭和男鹿半島ICと比較的早く開業した。

さらに北に高速道をのばすために、平成六年一月に路線が発表され、その後七年三月一七日昭和・琴丘間の中心杭打ち式を行った。道路は「石崎遺跡」をかすめる位置を通るので関係者は心配していたが、「中谷地遺跡」の遺跡部分が路線となつているので、通路になる部分だけの発掘調査をした。もう一カ所の野田の「北遺跡」も高速道路の通る部分を発掘調査することになった。北遺跡はICに近い所にあつた。

どちらも、県埋蔵文化財センターによって平成一一年五月から八月にかけて行われ、重要な発見があつたことは、前述してある。

工業は速やかに行われ、町内に「五城目・八郎潟IC」が開通したのは平成一四（二〇〇二）年九月二八日である。この自動車道の開通によって、自動車でそのまま東京までも大阪までも行ける理屈になった。道路は、北へは能代南ICまでであった。IC開通によって、わが町は高速自動車道路網に、直接組みこまれたのである。これは明治末の鉄道開通に乗るのを拒否し、結果的に鉄道を追い出してしまった保守的大失敗から、百年後に五城目町は全国につながる交通幹線を手に入れたのである。

普通の一般道も全国に通じている道路であることを否定する訳ではないが、高速自動車道の主要な任務は地方道と異なり、明治時代でいえば「鉄道」にたとえられるという意味がこめられよう。いずれにしろ、有料



秋田自動車道
昭和男鹿半島 IC～琴丘森岳 IC 間開通式

ではあるがその利用は大きくなっている。また、ICへの新設されたアクセス道路は、町の山の手側の集落や本町部から、八郎潟町方面への道路として利用価値が高い。

町の諸統計を見ると、その数値に町の将来に対して暗たんとした気持ちにおちこむ場合が少なくない。しかしその数値は、秋田県内のどこの市町村をとっても、ほとんど共通した重い問題なのである。

国勢調査などによる人口と世帯数をあげてみよう。(「国」は国勢調査)

昭和三〇年三月三十一日 新五城目町発足 人口一九七六一人

〃 三五年一〇月一日 国・二〇〇二五人 三六八九世帯

〃 四〇年一〇月一日 国・一八八六二人 三八六〇世帯

〃 五〇年一〇月一日 国・一六五八二人 三九五六世帯

〃 五五年一〇月一日 国・一五九五三人 三九三〇世帯

平成 二(一九九〇)年一〇月一日 国・一四一六一人 三八八五世帯

〃 七年一〇月一日 国・一三三七一人 三八七〇世帯

〃 一二年五月 一二九七二人 四〇五九世帯

人口の減少著しいものがあるが、県人口の減少。人口の都市集中(秋田市の人口増)、全国トップクラスの少子化などが、五城目町の場合も原因と考える。これに対して町が手を拱いていたのではなく、数次にわたる発展計画を樹てて対応してきている。

しかし発展計画で救える状況ではなくなっていて、泥沼から抜け出すのは困難と思われる。

このような状況に、最も危機感を持ったのは、当然のことだが、商工業者である。本町史で述べてきた中心テーマのひとつも「職人の町」と「朝市の町」で、物作りと商いの状況が中心である。五城目町商工会(会長伊藤万治郎)は、

商工会としての実態調査をした上で、町内外の有識者の意見や指導をうけている。その結果や問題を報告書にしている。
平成九(一九九七)年度「五城目町地域資源調査報告書」――
朝市と職人と伝統文化のまち――
平成一〇年度 むらおこし事業 ―朝市と職人と豊かな自然につつまれた町―五城目



悠紀の国五城目

この二冊には調査の方法とその結果と対策を報告しているが、その具体的な対策が実行されたかどうか、問題が残る。
商工会が危機感を大きくしていた頃、大型店ジャスコ・ショッピングセンター進出の話が流れた。やがて、その進出希望はつきりし、その場所も大川西

「農林水産物直売施設」を建設中 ミズバシヨウのある道の駅へ

現在町では、富津内の国道285号線沿いに、「農林水産物直売・食材供給施設」の建設工事を進めています。
この施設は、地元で採れた、生産者の顔が見える作物を販売しようと、町内の皆さんの要望にこたえながら計画が進められています。
管理運営については、将来の「道の駅」併設も視野に入れています。
現在、管理運営のため、組合組織などの詳細について、検討を進めています。
「広報ごじょうめ」来月号では、「組合員」の募集内容などをお伝えする予定です。

整備が進められている農林水産物直売・食材供給施設の計画図
周辺部は多額の財政負担を伴うので、現在は計画のみ

野字田屋前・国道二八五号線に面した所であることが伝えられた。

そうした動きに、町議会はジャスコ五城目ショッピングセンター誘致を決議、町民も町内業界も、それに賛成した。それが、なかなか具体化されなかったのは、進出場所の農地にはすでに「農振法」の網がかけられていたためで、この解除に時間がかかった。

ジャスコ五城目ショッピングセンターの従業員は、全体で約五〇〇人、内ジャスコが三〇〇人でその中の一六〇人以上を町内在住者を採用するといっていた。テナントが採用する人員が、それにプラスされるから、明るい見通しであった。町議会で佐藤町長は以上のような答弁をしている。

町民はいらいらしたが、平成一三（二〇〇一）年六月一六日に開店した。広い駐車場があり、その商圏は秋田市北部から山本郡・男鹿市・北秋田郡阿仁町、そして南秋田郡全体で、大型店の集客力に目をみはった。その人々が、朝市だけでなく、本町部の商店・専門店・飲食店に来てくれるかが問題である。その解答はどうなっているのだろうか。ジャスコだけでなく、交通量の多い二八五号線沿線には、次第に商店・食堂が増えている。

その中で特記しておきたいのは、「道の駅」の設置である。平成一二（二〇〇〇）年一月一日付の町広報に「農林水産物直売施設」を建設中という記事があり、「ミズバショウのある道の駅へ」という見出しもある。

地元で採れた生産者の顔が見える作物を販売しようという要望にこたえながら計画が進められているとし、管理運営は「道の駅」の併設を考えて進めているとし、利用組合による民間運営、敷地内のミズバショウを保護する小公園を道の駅といっしょにした運営も考えているとしている。という記事である。

平成一三年八月一日オープンはこの施設は、二八五号線沿い富津内下山内字広ヶ野七六にある素晴らしい施設、「悠紀の国五城目」という道の駅・物産直売所としてにぎわっている。ミズバショウの小公園も話題になる。

町村合併

明治時代になると、明治政府は藩を県にし、その下に大区と小区をおき地方行政を行った。「大区小区制」は、歴史や実状を考慮することなく機械的に区分したもので、不自然な行政組織といわれ初めから不評であった。

明治二二（一八八九）年四月になって「市町村制」が施行された。馬場目・馬川・富津内・内川・五十目（明治二四年町制をしき五城目町）・大川の村々が生まれた。（それぞれの集落は、町村制以前の村に当る。）町村制は江戸時代の村々の合併によって生まれたのである。

昭和二八（一九五三）年一〇月、「町村合併促進法」が三年九月三〇日までの時限法として施行されると、県の指導もあったが、より広域的な自治体である方が、現状に合うという考えから、秋田県内ではすべての町村が合併した。昭和三〇年三月、新五城目町が発足している。

平成年間の五城目町発展計画は、元年から四年までの「新総合発展計画」で、これには「まちおこし町民一〇〇人会議」の答申が生かされた、町民の発展計画であった。

平成九年から一三年までは、一〇か年の計画である「新総合発展計画」を前期五か年で見直しして、後期五か年の計画をするという新しい発想のプランになっている。

さらに平成一四年四月から「新世紀総合発展計画」によって、新しい世紀にふさわしい町づくりを目指した。この計画には「思いやりと活力に満ちたふるさと創生」とキャッチフレーズがついている。

町民に配布した総合発展計画のダイジェスト版を開くと、工事中だがほとんど出来あがった五城目、八郎潟ICの航空写真が載っている。そして町のイメージを書いてある。

二〇一一年ふるさとのイメージ

○農山村は複合経営が進み新しい五城目農業の息吹に溢れ、活気が甦り、商工業も活発に展開されています。

○高齢者福祉の拠点が完成しつつあり、高齢者福祉・児童福祉等の対策の充実が図られ、心のかよう福祉の町づくりも進んでいます。

○閑静な郊外には、教育施設が整備され、子供達の元気な姿があります。

○国道二八五号と県道秋田八郎潟線の整備が進み、秋田市から男鹿半島に至る中央地区観光ルートも完成しています。

○農山村を結ぶ農道や林道、中心市街地の都市計画道路や外環状線が整備され、移動空間としての交通システムが形成されています。

○国道二八五号沿いの南側には新しい商業エリアが形成されています。また東側には、物産直売所、道の駅周辺の開発整備が進んで県内外から訪れる客で賑わい、町の活力となる拠点の一つとなっています。

○ＩＣ周辺には、高速自動車道の利便性に着目し、新たな住宅地の展開や物流施設が進出しています。

○町のシンボル森山周辺は、生活環境保全林が整備され、散策する人やキャンプをする人々で賑わっています。

○馬場目岳を中心とする観光開発も進み、清流と緑豊かな自然に親しむ町内外からの観光客や山村交流体験交流やグリーンツーリズムの展開など、多くの人々で賑わっています。

○下タ町通りは、商業も活発となり、朝市とその歴史を伝える赤レンガ館は、多くの買い物客や観光客で賑わいを見せています。

○雀館公園の周辺は、桜の名所として整備が進み観桜客で賑わい、また文化芸術と生涯学習など多様な活動の拠点エリアとして多くの人々に活用されています。

○定住人口の確保をめざした新たな住宅団地の整備も進んで、新しい居住空間が形成されています。

○スポーツの普及とスポーツ人口の拡大が図られ、体育施設も整備され、いろいろなスポーツで楽しむ町民の元気な姿が多くなっています。

○町民参加による自立と共生の地域づくり、パートナーシップの協働の町づくりへの取り組みも積極的に展開されています。

このような発展計画が着実に実現された「二十一世紀の町」の姿は、われわれ町民の夢でもあるが、やがてそれぞれの自治体が構想（発展計画）を持ち寄り、協力・協働して町づくりをするという気運が生まれてきた。ここからも「町村合併」の動きが感じられる。

昭和三十一年六月、新市町村建設促進法施行。三三（一九五八）年四月、旧面潟村岡本・浦横町・野田が編入合併して、人口もさることながら、町域が随分ひろがった。

今回の「平成の大合併」は「市町村の合併の特例に関する法律」によって行われるもので、政府は全国の自治体（市・町・村）を現在の三分の一にしたいという。県では六九市町村を大型合併によって九市にしたいという合併パターンを示している。

今回の合併法は、施行期限が一七年三月三十一日であるので、県の合併案の指導もあつたりで合併は急いで行われたようにみえる。

県が示した合併パターンは九パターンであつたが、五城目町ではパターンＡの湖東部（五城目町・八郎潟・井川・飯田川・昭和）五町に傾いていたらしい。ところが、どのパターンにもなかった飯田川・昭和・天王の三町がさつと合併協議会をつくり、あっさりと潟上市をつくってしまった。そこで残った湖東部三町の五城目・八郎潟・井川三町の県で示したパターンＡ二で協議せざるを得なくなった。

平成一五年四月一八日、三町は「湖東三町合併懇談会」で最初の話し合いをしている。この懇談会は七月二四日まで五回も開かれ、任意合併協議会を設置するところまで、協議がすすんだ。

八月六日、県の合併重点支援地域指定書の交付式の後、任意合併協議会設置合意書調印式を行い、直ちに「五城目

町・八郎潟町・井川町任意合併協議会」が設立され、会長に佐藤邦夫五城目町長が就任し、副会長は他の二町の町長が就任している。任意協は一〇月一四日まで四回開催、相当具体的内容の協議を重ねたので、次の段階にすすむべき時になっていた。

一〇月二十九日に行われた三町それぞれの臨時議会の決議を経て、一〇月三十一日三町の法定の合併協議会設置の協議書の調印、「五城目町・八郎潟町・井川町合併協議会」を設置。十一月一日に早速第一回合併協議会を開催。合併は対等合併で新しい町をつくることを確認している。第二回は一月二五日に行われ、新町の名称は公募によるとしている。町名のことだけを書くと、応募町名から「新町名候補選定小委員会」が九点選定、協議会で「湖東町^{ことうちょう}」に決定。そして合併期日は平成一七年一〇月一日としたのに、井川町が突然協議会から脱退、三町合併は二町合併に向うが話し合いつかず氷解してしまう。これまでの協議会や小委員会、そして事務局のち蜜な話し合いや作業はなだったのか。空しい思いが強い。新町名まで決ったのに、井川町の脱退理由は一般町民の理解を超えるものであった。

町が合併するには、大変なエネルギーをつかうものだという実例になるような合併不調劇であった。

しかし、①広がる日常生活圏 ②少子・高齢化社会いよいよすすむ ③住民が求める独自の地域づくり ④自治体財政の悪化 ⑤発展計画の具体化の可能性 という状況を思うと、自治体の規模は一定の大きさが望ましい。それが合併のメリットで、今後の規模の小さい自治体の歩む道は、きびしい。

このあと合併は、大きな問題として再び姿を現わすであろう。

モーターライゼーションが急速にすすむと、これまでの道路が時代に合わなくなった。車の交通量とスピードに合った道路が要求されるようになった。「開発と交通」でふれたように、国道七号線の付替工事と五城目・八郎潟間の県道直線化（バイパス化）工事が完成している。

七号線工事もバイパス化で、七号線は大川や一日市の町内を通らず、馬場目川に新しい橋がかけられ、さらに国道は

まっ直に、夜叉袋・真坂の東をのびて郡境三倉鼻へ向う。工事は秋田市方面からはじまり、町内分は昭和四一（一九六六）年中におわっている。このバイパスに五城目・八郎潟間の県道が直線化されて十字路となる。

前述の通り、飯田川町から井川町坂本を経て五城目を経て上小阿仁村に向う県道は昭和四八（一九七三）年に国道に昇格し二八五号になった。これによって、改修工事の予算が大幅に増加、特に郡境の割山峠（秋田峠）付近の改修はめざましいものがあつた。

かつて五城目の人びとの「夢」とされていた阿仁道路（二米道路）は、自動車の時代になって果たされつつあるといつてよいだろう。

二八五号の利用率が、年々増大しているのは、秋田市が中心の県中央部と県北地方（大館・鹿角地域）との最短の連絡道になり、東北自動車道の十和田南インターとも結ばれるという、利用価値があつたからである。

町村合併により新しい五城目町が、昭和三〇（一九五五）年三月三十一日にスタートしたが、それから一カ月後には最初の町長選挙で菊地米蔵が当選している。それより前の四月二日には初議会が召集された。（初代町議会議長・畠山松太郎就任）そうした中で三〇年五月一日、早くも「新町建設五カ年計画」が策定されているのには、驚かざるを得ない。どんな意気込みで町村合併が推進されたのか。県案よりも広域合併を実現させたことを、振り返ると大きな希望と決意を、新町発足にこめていたことがわかる。

町の計画を追うように、三一（一九五六）年一月「新市町村建設基本方針」を政府が決定、四月には「総合振興五カ年計画」を県が策定し発表しているのである。

地すべり

平成一三（二〇〇一）年七月一六日未明、本町地域はにわかに集中豪雨が襲い、富津内下山内字猿田沢と富津内富田字大ナコのあたりの斜面一帯で大規模な地すべりの危険があるという状態になった。大雨と山

頂部近くの沼の水があふれ出して、山腹に亀裂が走り山全体の地すべり状態になってしまったように認められた。

町では、最近にない大きな自然災害発生のおそれ、早速佐藤町長を本部長とする「五城目町猿田沢・大ナコ地区地すべり災害対策本部」を設置し、その対策に全力をあげた。場所は江戸時代までの内川地区に通じる街道の分岐点で、道は山内城跡の山の下と富津内川に合流しようとする浅見内川（内川川）と間のせまいところである。

地すべり状態の山腹には、小倉温泉の大きな建造物と広い駐車場があり、山腹を削ってそれらは造成されている。山は昔の山内城跡で、私有地が入り組んでいるため、町指定の「史跡」にはなっていない。

麓の川沿いの土地には数戸の民家があるので、山腹・麓の住民に避難勧告を一六日中に出している。その後、地すべり防止の工事を県当局と協議の上ですすめ、現在は安全とされる状態になっている。しかし、今後は具体的な自然災害対策の策定が必要である。

高齢化すむ

現在、秋田県のかかえる問題の第一とはいわなくても、大問題は「高齢化」である。その点では本町でも同様と思われる。毎年夏に行われる町の敬老式は、あ幅広い広域体育館のフロアがいっぱいになる。その時に配られる七〇歳以上の高齢者名簿には、約二九〇〇名（平成一五年度）である。まことに大きな数字といわざるを得ない。

それはそれとして、本町は高齢福祉の先進地であった。すでに昭和二七（一九五二）年九月、五城目養老院森山荘を開院している。畑町の民家を町が購入し、改装の上養老院としたのである。所有者は田町に製材所を経営する方であったから、大きな平屋の建物であった。時の町長菊地米蔵・議長畠山松太郎の決断による設置であった。

そうした歴史の上に、岩野地区に開設された。その前に平成六（一九九四）年五月二〇日、社会福祉法人「五城目やまゆり会（理事長伊藤準一郎）が設立された。五城目町の「町の花」の名前を会名にした会は、老人ホームを建設する

ための福祉法人で、ホームが出来たらその経営に当ることになる。

その建設場所は、市街地に近いのに静かでゆつたりとした里山の麓で、眺望のよい岩城町に定められた。すでに巨大な屋内体育館のような、屋内ゲートボール場があり、高齢者がいつも集まっていた隣接地であった。

次の年の四月三日やまゆり会特別養護老人ホーム「広青苑」とケアハウス「いこいの里」が完成し開設された。

町では、昭和三九（一九六四）年六月一四日に最初の全町老人クラブ福祉大会を五城目小学校を会場に開催しているが、すでに各地域に老人クラブを結成されていたからである。注意したいのは、「高齢者」といわず「老人」とよんでいることである。クラブの中には、立派な指導的人物がいて、「川端会館」などという拠点集会所を持ち、活発に福祉的・奉仕的活動をしていたグループがあった。

福祉大会を開いた一〇年後の昭和四五（一九七四）年七月一六日、第一回老人スポーツ大会が雀館公園で行なわれているが、「元氣印」ということは流行ったのもこの頃。七月二六日には第一回社会福祉大会が行われた。

平成一五年度「五城目町敬老式」は九月三日に町主催で行われたが、会場の広域体育館のフロアは出席した高齢者でいっぱいであった。当日配られた七〇歳以上の高齢者名簿には、約二九〇〇人の名前が掲載されている。

これからも高齢者対策は、町政の重要課題の一つとなっていくであろう。そのひとつとして、平成一二年四月一日から「介護保険制度」が始まったが、きびしい批判もある。

町では制度の円滑な導入ができるようにと、関係条例を設置・整備して、基金積み立てをはじめなければならない六五歳以上の人の保険料を六カ月間免除、さらに一年間半額にするなど、高齢化社会に対応した細かなサービスによって批判に応えようとした。しかし高齢者にとって保険料徴集が、年金から有無をいわせず差引かれるのは、不評であった。この特別会計は七億三三〇八円でスタートした。また、介護センターも設置された。

子供不足

そうすれば、秋田県が抱える「少子化」も問題である。秋田県の「出生率」は全国最低のレベルにあるといわれている。しかも若い人たちの結婚も遅れがちといわれる。

こうした傾向は、本町の場合も同様の問題点であろう。年々小学校の新入生が減少し、学校統合によって小・中学校維持さなければならない学校があり、すでに富津内小学校が廃校になっていて、近い中にそうなる小・中学校も二校はあるという。

義務教育学校の前の段階の保育園・幼稚園の統合も考えられるという現実、町の将来に暗雲となるであろう。

少子化の問題は、生みやすく、育てやすい条件を整えてやることであるが、町財政の中で、平成一二（二〇〇〇）年六月一日から、児童手当の支給を小学校就学前まで拡大、八月一日からは福祉医療制度改正によって、小学校就学前まで医療費を無料するなどをしている。

平成一五年度内に、建築後三七年の五城目幼稚園、同じく三一年の五城目保育園の新築を、幼・保一体の施設として新築工事を六月から始める予定で、もりやまこども園の開園は明年早々二月二三日を予定している。小学校通りは、いつでもにぎやかになりそうである。